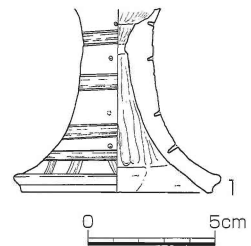


で出土した。これに接合する杯部の破片は認められなかった。外面調整はミガキと考えられるが、単位は明瞭でない。ミガキに消されたタテハケの痕跡が一部にみられる。文様は櫛描工具によって横方向に4段と、裾部においてナナメ方向に櫛描文は、ヨコ方向に4段と、ナナメ方向に推定12単位が施される。ともに幅7mmでかつ線の構成が同一であるため、両者は同じ工具によって施文されたものといえる。脚端部の形状は、小さいが段が作り出されている。四方には4段の未貫通の刺突がなされる。文様及び形態から、弥生時代後期初頭に属すると考えられる。



番号	器種	法量 (cm)	形態・手法他	色調	胎土
1	高杯	底径: (7.5)	内: 強いナデ・ケズリ・一部はがれ、外: 横方向の櫛描文4段・裾にナナメの櫛描文、四方に刺突4段(未貫通)、1/2残存	淡黄灰色	微砂

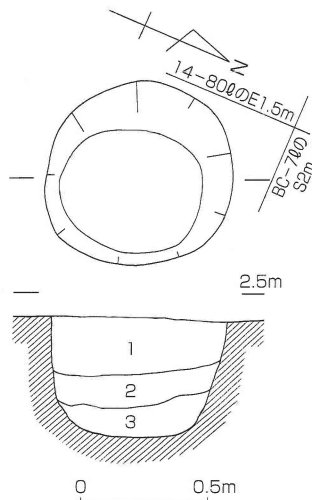
図40 溝5出土遺物 (縮尺 1/3)

b 土坑

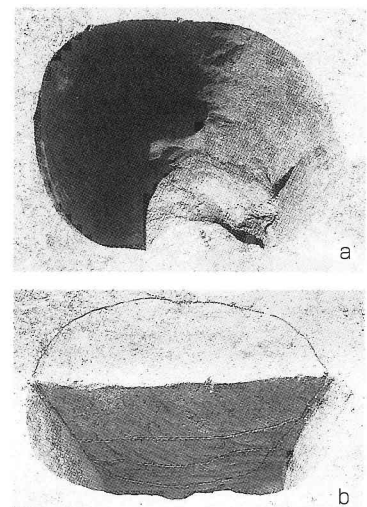
土坑17 (図41)

BC14-77区に位置する。溝3上面および10b層において検出した。溝3の埋土を掘り込んで作られている。上面の標高は2.40m、底面は1.93m、深さ47cmを測る。

平面形は円形、断面形は円柱状となる。底面はほぼ平坦となる。基盤層である17層を約40cm掘り込んで作られており、底面からは水のしみ出しがみられた。湧水層まで掘削が及んでいたものと考えられる。埋土はいずれも粘質土であり、三層に分層した。1・2層は灰褐色粘質土で炭粒を少量含む。底面に堆積する3層はしまりが弱く粘性が強い淡青灰色粘質土となる。水性堆積層と考えられる。



1. 灰褐色粘質土 (炭粒少)
2. 灰褐色粘質土 (炭粒少)
3. 淡青灰色粘質土



a. 完掘状況(東から) b. 土層断面(東から)

図41 土坑17 (縮尺 1/30)

なお、出土遺物はみられないが、溝を切って作られていることと検出面から弥生時代後期頃に相当するものと考えられる。

土坑18 (図42)

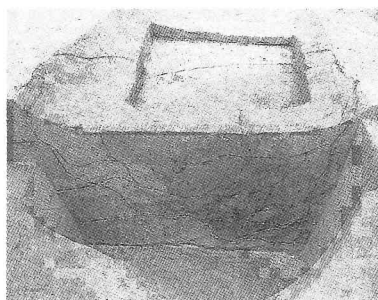
BC15-19区に位置する。溝2・3の埋土を掘り込んで作られた土坑である。溝3の範囲を調査中に検出したものであり、本来の土坑上面のレベルは溝3上面に当たる高さまで上がるものと考えられる。検出レベルは2.31m、底面は1.73m、残存部の深さ58cmを測る。

平面形は不整形な隅丸形状を呈する。現存長164cm、現存幅101cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、北側に底面が寄っている。底面は平坦である。底面では水のしみ出しがみられ、意図的に湧水層まで掘削がなされていた可能性がある。壁面については、南側が段状となるのに対し、北側は垂直気味に底面まで掘り込まれている。埋土は1~9層に分層した。埋土は、大別すれば①暗灰色粘質土(1・6・8層)、②灰白色砂質土(2・4・5・9層)、③淡灰色砂質土・粘質土(3・7層)に区分することができる。埋土は互層状に堆積する。土層断面を検討した当初は南側が段状となることから、掘り返しを想定したが、調査の過程で平面・断面において明瞭な掘り返しラインが認められなかった。

調査の成果



完掘状況（東から）



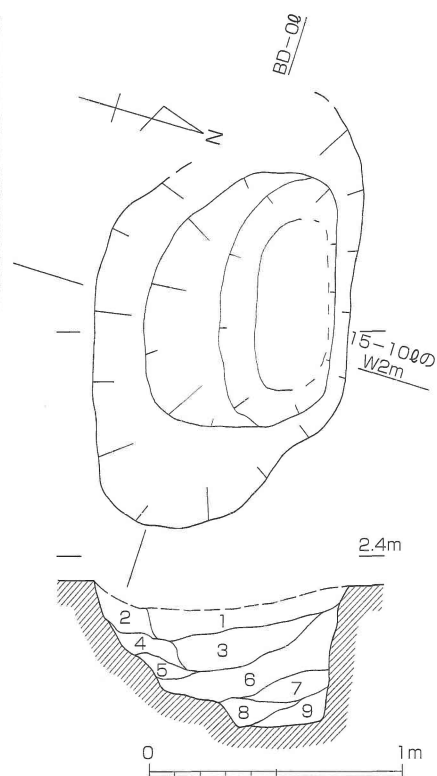
土層断面（東から）

なお、遺物はみられないが、溝2・3の埋土を掘り込んでつくられていることと周囲の状況から弥生時代後期頃に相当するものと考えられる。

土坑19（図43）

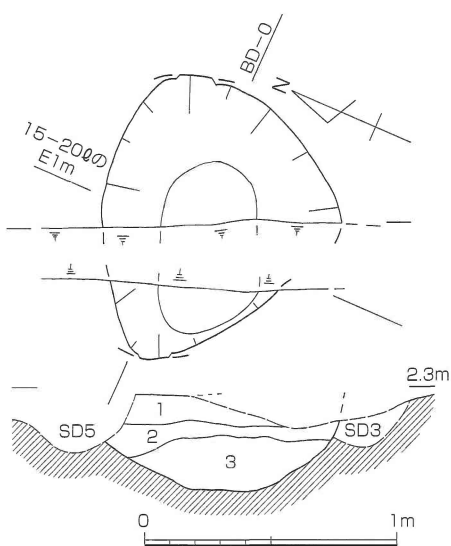
BC15-19区に位置する。溝の調査時に検出した。本土坑は、溝2・3の埋土を掘り込み、溝5によって切られている。したがって、溝同士の切り合い関係と併せて、各遺構の先後関係を整理すると、溝2→溝3→土坑19→溝5となる。検出レベルは2.26m、底面が1.88m、深さ38cmを測る。

平面形については、上面のラインが東端と西端の一部にしか残っていないが、不整形な楕円形を呈している。現存長113cm、現存幅



- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 暗灰色粘質土 | 6. 暗灰色粘質土 |
| 2. 灰白色砂質土
(粗砂、暗褐色ブロック) | 7. 淡青灰色粘質土
(暗褐色ブロック) |
| 3. 淡青灰色砂質土(細砂) | 8. 暗灰色粘質土 |
| 4. 灰白色砂質土
(粗砂、暗褐色ブロック多) | 9. 灰白色砂質土(細砂) |
| 5. 灰白色砂質土
(粗砂、暗褐色ブロック) | |

図42 土坑18（縮尺1/30）



- | | |
|---------------|-----------------------------|
| 1. 灰白色砂質土(粗砂) | 3. 淡青灰色粘質土
(灰白色粗砂ブロック含む) |
| 2. 淡青灰色粘質土 | |



a. 完掘状況（西から） b. 土層断面（西から）

図43 土坑19（縮尺1/30）

95cm を測る。

断面形は、底面が平坦な挿鉢状を呈する。埋土は三層に分層した。1層は灰白色の粗砂層、2・3層は淡青灰色粘質土である。3層下面には5cm大の灰白色粗砂ブロックが含まれる。

なお、遺物は出土していないが、溝3と溝5の間の期間に構築されていることから、本土坑は弥生時代後期初頭頃に相当するものと考えられる。

4. 包含層出土遺物

弥生時代の包含層の遺物は、本体調査区の谷2、及び共同溝調査区の谷1の埋土中（10～15層）から出土している。遺物は土器と石器からなる。土器については大半が小片で摩滅したものであり、掲載した資料についても全体として風化したものが多くみられる。出土量は、土器と石器をあわせてコンテナ一箱分である。出土量こそ多くはないが、特筆すべき遺物として東日本系の土器として知られる舟形土器が挙げられる。

層位的に出土遺物をみると、15a・b層は、弥生時代早期～前期末までの土器、及び石器を包含する。遺物は谷2を中心としており、他の層と比べて15a・b層からの出土が最も多い。12・13層中からは、弥生時代中期～後期の土器、及び石器が出土している。なお、14層中からは遺物はみられなかった。また、10・11層中からは少量の土器が出土しているが、弥生土器の小片であり掲載できる遺物はなかった。

土器（図44・45）

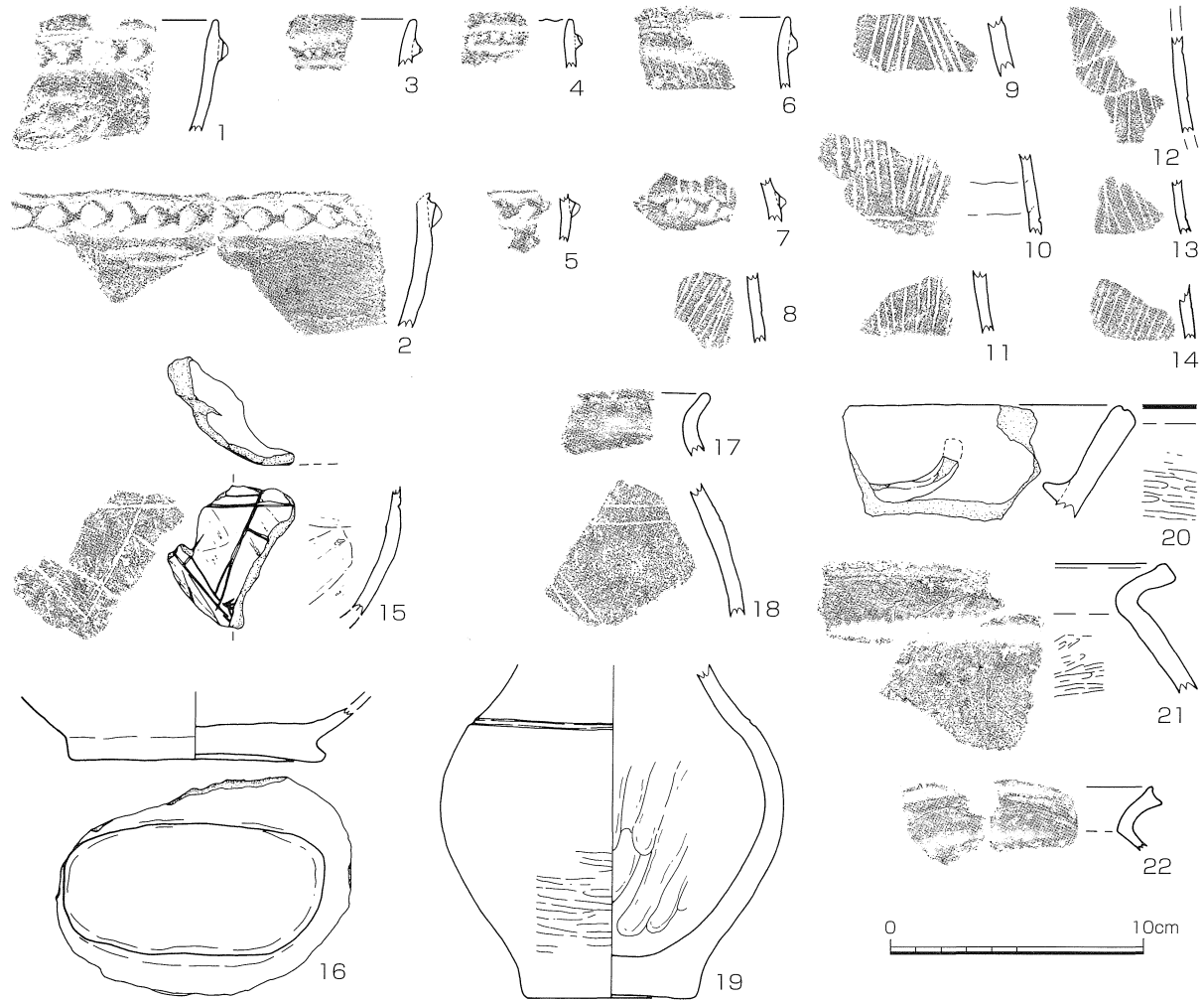
1～14は、弥生時代早期の突帯文土器片である。1～7は突帯をもつ深鉢片、8～14は沈線文が描かれた頸部小片である。

突帯及び刻み目については、1・2が比較的大型の突帯と刻みがなされるのに対し、3～7は小型であることが特徴的である。1は口縁部片であり、突帯幅約10mm、刻み目幅約7mmで、刻み目の形状は「D」字状となる。口唇部に刻み目は施されていない。2は口縁部端部を欠損した破片とみられる。突帯幅約10mm、刻み目幅約10mmで、刻み目の形状は丸形となる。3は口縁部小片である。突帯幅約7mm、刻み目幅約2mmで、刻み目の形状は菱形となる。口唇部に刻み目は施されていない。4は口縁部小片で、風化が著しい。突帯幅約6mm、刻み目幅約4mmで、刻み目の形状については明瞭でないが菱形となる。口唇部には刻み目状に凹凸がみられるが、風化の影響である可能性もある。5は口縁端部を欠損した小片と考えられる。突帯幅約8mm、刻み目幅6mmで、刻み目の形状は菱形をなす。6は突帯を有するが刻み目は認められない口縁部片である。突帯幅は約9mmとなる。口唇部にも刻み目は施されていない。突帯下には、8条の沈線による斜線が描かれる。7は、二条突帯深鉢の肩部片の可能性のある小片である。突帯幅約8mm、刻み目幅約5mm、刻み目の形状は不定形であるが菱形となる。突帯よりも上部には、斜めの沈線文が6条みられる。

8～14は、斜線の沈線文がみられる小片である。いずれも断片的ではあるが、文様構成からここではa～c類に分類した。まずa類は、4～5本の沈線を一単位としてハの字形または逆ハの字形が描かれるものである（9～11）。9はハの字形、10・11は逆ハの字形となる。b類は、一方向の多条の沈線文が施されているもので、8・14が該当する。小片であるため、a類のようにハの字形となる可能性も十分にある。c類は、縦に1本の沈線が引かれ、その両側に斜線文が描かれるものである。12と13が該当し、両者は文様構成と色調から同一個体と思われる。

15・16は、舟形土器と考えられる¹⁾。15は、斜線文様を有する口縁部付近の破片である。15a層から出土している。沈線文も含めて全体的に風化している。平面形は円形には湾曲せず、緩やかな屈曲が認められるため、舟形土器の四隅にあたる破片である可能性が高い。文様は沈線による横線と斜線からなる。横線は斜線よりも先に描かれる。沈線は、先の尖った工具で描かれている。内外面はケズリによる調整が施されている。16は、舟形土

調査の成果



番号	器種	出土位置	法量 (cm)	形態・手法他	色調	胎土
1	針	15層	-	口: ヨコナデ、内: ヨコナデ、外: ヨコナデ・弱いナデ・刻み目突帯	黒灰色、暗灰色	細砂
2	深針	15 a・b層	-	内: ヨコナデ・平滑、外: ヨコナデにより沈線状に線がつく・ヨコナデ・刻み目突帯・煤	黒灰色	微砂
3	深針	15 a層	-	口: 刻み目なし、内: 風化、外: ナデ?、刻み目突帯(小)	淡灰黄色	細砂
4	深針	15 a層	-	口: 刻み目か(風化激しく明確でない)、内: 風化、外: 弱いナデ・刻み目突帯(風化)。傾きは小片のため不明確。	暗灰黄色	細砂、細礫含む
5	深針	15 b層	-	内: ナデ、外: ヨコナデ・ナデ・刻み目突帯。	暗橙灰色	細砂
6	深針	15 b層	-	口: 刻み目なし、内: ヨコナデ、外: ヨコナデ後粘土貼り付け(刻み目なし)。沈線文8条。	暗橙色、暗灰色	細砂
7	深針	13 b層	-	内: ヨコナデ、外: ナデ・沈線・ヨコナデ・刻み目突帯。二条突帯か? 沈線文6条。	淡灰黄色	粗砂
8	深針	15 a層	-	内: ヨコナデ、外: ナデ・沈線文8条。傾きは小片のため不明確。	暗灰褐色、灰褐色	微砂
9	深針	15 b層	-	内: ヨコナデ、外: ナデ?・沈線文9条。	暗灰色	細砂
10	深針	15 a層	-	内: ヨコナデ(接合痕がみえる)、外: ナデ・ヨコナデ・沈線文9条。	淡灰褐色、暗灰茶褐色	細砂
11	深針	13層	-	内: ナデ?、外: ナデ? 沈線文9条。	暗灰色	細砂
12	深針	15 a層	-	内: ナデ、外: ナデ・沈線文12条。傾きは小片のため不明確。	暗灰黄色、暗灰褐色	細砂
13	深針	15 a層	-	内: ヨコナデ、外: ナデ・沈線文6条。傾きは小片のため不明確。文様構成: 色調から12と同一個体。	暗灰黄色、暗灰褐色	細砂
14	深針	15 a層	-	内: ナデ?、外: ナデ?・沈線文9条。全体に風化。	灰黄色、暗灰黄色	細砂
15	舟形土器	15 b層	-	内: ヨコナデ、外: ヨコナデ・ナデ・沈線	暗茶褐色、暗橙褐色	粗砂
16	舟形土器	15 a層	底長: 10.3、幅: 5.3	外: ヨコナデ、底: ナデ。底部立ち上がりは一部くの字状で他はほぼ直立。	暗灰色、暗黄灰色	微砂~細砂
17	壺 or 甕	15 a層	-	内: ヨコミガキ、外: ヨコミガキ・沈線。全体に風化。	淡灰黄色	微砂
18	甕	15 b層	-	内: ヨコナデ、外: ヨコナデ・平行沈線	淡灰色、淡灰褐色	細砂
19	壺	15 b層	底径: 6.8~6.3	内: ヨコミガキ・タテナデ、外: ヨコミガキ(風化のため部分的に残存)、底: ナデ	暗灰黒色、淡灰橙色	細砂、細礫含む
20	壺	15 b層	-	口: 沈線・ナデ、内: ヨコナデ・ナデ、外: ヨコミガキ	淡橙褐色、淡灰黄色	細砂
21	甕	12~13 b層	-	口: ヨコナデ、内: ヨコナデ・ヨコ・ナナメミガキ、外: ナデ?	淡灰黄色	微砂
22	甕	13層	-	口: 強めのナデ、内: ヨコナデ、外: ヨコナデ	淡灰黄色	微砂

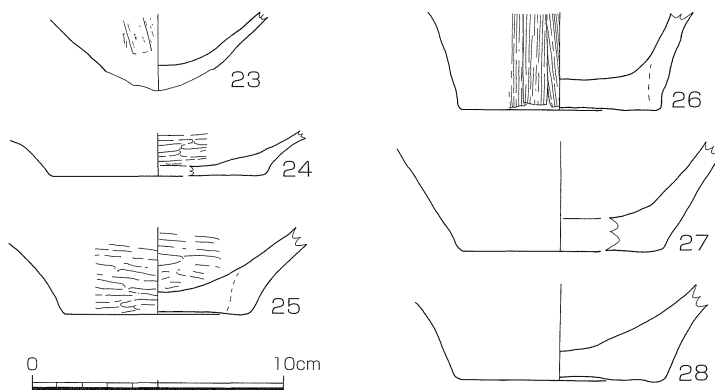
図44 弥生時代包含層(15~10層)出土遺物1 土器1(縮尺1/3)

器の底部と考えられる破片で、平面形が長楕円形を呈するものである。15 a層から出土している。15の資料とは胎土が異なるため、別個体である可能性が高い。16の胎土については、津島岡大遺跡で見られる突帯文土器と類似したものであり、在地生産の可能性はある。これらの舟形土器の時期については、出土層位と類例の存在から、いわゆる津島岡大式の時期に並行するものと考えられる。

17～19は、弥生時代前期に属する資料である。19は、口縁部を欠いた壺である。頸部と胴部の境目には1条の沈線文が施されており、前期中頃に属するものと考えられる。17は、壺か甕の口縁部から頸部にかけての小片である。破片の下端にわずかながら沈線文の痕跡がみられ、前期中頃に属するものだろう。18は甕の肩部片と考えられる。2条一単位とした文様が、横方向と斜めに施されている。20は、内面に貼付突帯が施された壺の口縁部片である。突帯は弧状にカーブしている。前期後葉の資料と考えられる。

弥生時代中期～後期に属する資料も、少量ながら出土している。21は弥生時代中期前葉の甕の口縁部片である。22は後期の甕口縁部片である。

23～28は底部片である。摩滅により、調整が不明瞭なものが多い。23は底部の下端面がはがれた破片である。24は浅鉢であり、弥生時代早期頃のものと考えられる。25～28は弥生時代前期ごろと考えられる底部片である。



番号	器種	出土位置	底部径(cm)	形態・手法他	色調	胎土
23	浅鉢	15層	—	内: ナデ、外: タテケズリ・ヨコナデ、底面の粘土がはがれる	淡灰褐色、暗灰褐色	細砂、細礫含む
24	浅鉢	15 b層	(8.5)	内: ミガキ、外: ヨコナデ、底: ナデ(直線的)、外面に赤色顔料、1/3残	暗灰褐色、暗橙褐色	微砂
25	壺	15 b層	7.4	内: ミガキ後弱いナデ、外: 細かいミガキ、底: 細かいミガキ、1/2残	淡黒灰色、淡灰褐色	細砂
26	甕	15 b層	8.1	内: ナデ、外: ナデ?・ハケ目、底: 押さえ・ナデ・植物質の痕跡あり、2/3残	暗灰色、淡灰褐色	細砂、細礫含む
27	甕	15層	(8.2)	内: ナデ、外: ヨコナデ、底: 粗いナデ、1/3残	暗灰茶褐色、暗灰黄色	細砂
28	甕	13 a層	(8.4)	内: ナデ・指押さえ、外: 横方向ナデ、底: 直線方向のナデ、1/3残	暗灰色、淡灰黄色	粗砂

図45 弥生時代包含層(15～10層)出土遺物2 土器2(縮尺1/3)

註

(1) 15・16の資料については、明治大学の石川日出志氏と國學院大學栃木短期大学の小林青樹氏、駒澤大学の設楽博己氏に、実物を検討していただいた。器種や時期、文様の特徴、胎土等についてご教示いただいた。

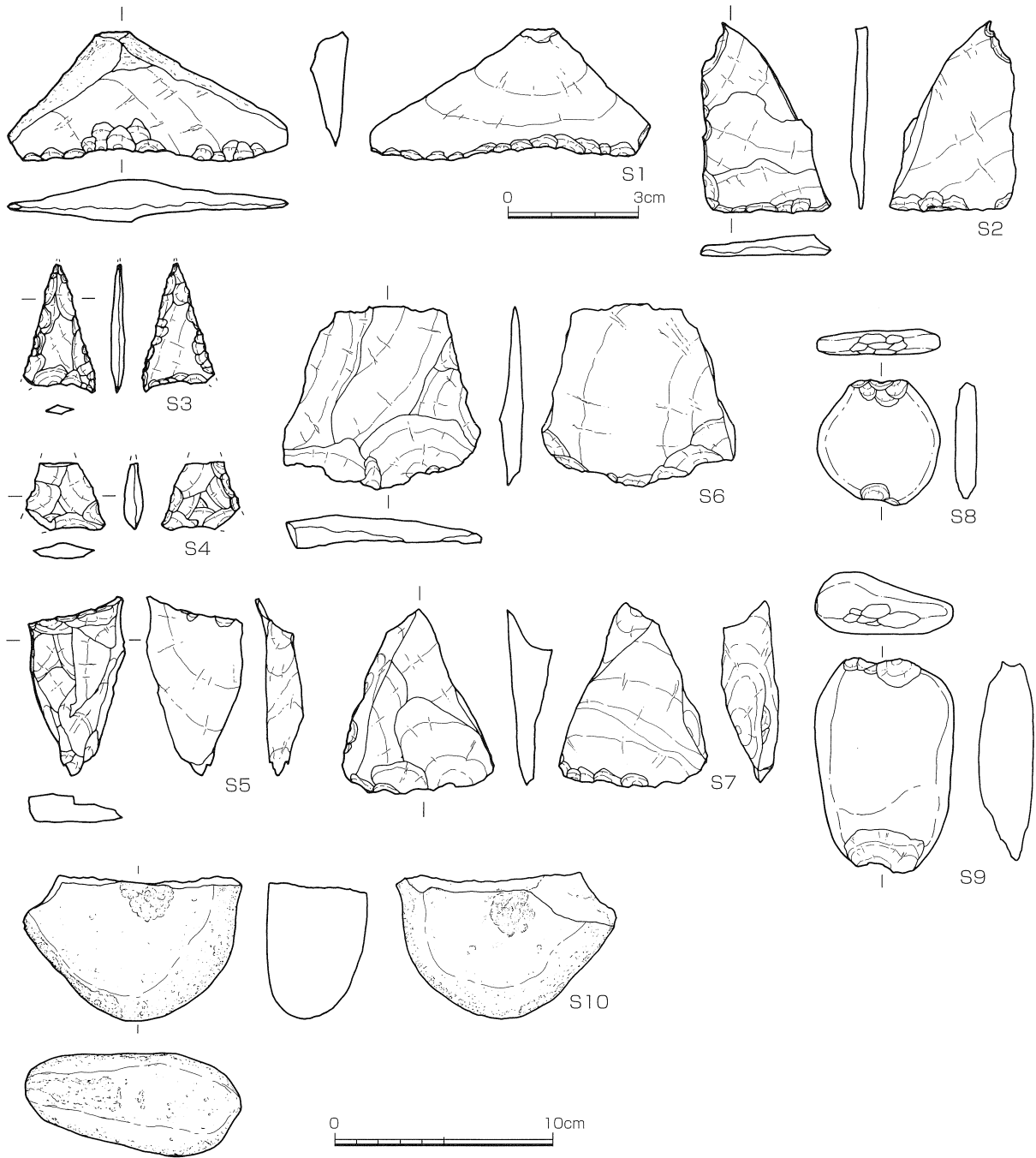
石器(図46)

石器は、剥片類も含めて包含層から約60点が出土している。

剥片石器の石材は、いずれもサヌカイトである。S1・2は、両面調整が施されたスクレイパーである。S3・4は石鏃であり、凹基無茎鏃である。S5は楔形石器であり、片側に剪断面が残る。6・7は、微細な剥離痕をもつ石器である。6は下縁に、7は下縁と片方の側面にそれぞれ剥離がみられる。

S8・9は石錘である。8は風化した安山岩、9は流紋岩質凝灰岩である。S10は、流紋岩製の磨石である。側面に摩滅した箇所がみられる。中心部も摩滅しており、凹石としても利用されている。

調査の成果



番号	器種	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	特徴
S 1	スクレイパー	15 a	30.1	64.0	7.8	9.8	サヌカイト	両面調整
S 2	スクレイパー	15 a	44.3	29.3	4.9	5.8	サヌカイト	両面調整
S 3	石鏃	11	(30.0)	(16.7)	3.0	1.0	サヌカイト	凹基無茎鏃、先端部・基部欠損
S 4	石鏃	13 b	(15.5)	(18.4)	4.3	1.0	サヌカイト	凹基無茎鏃、先端部・基部欠損
S 5	楔形石器	15 b	41.3	22.1	8.2	6.7	サヌカイト	上下潰れ、側縁一部欠損、剪断面1面
S 6	微細な剥離痕のある剥片	15 b	42.3	45.0	6.8	11.6	サヌカイト	両面調整
S 7	微細な剥離痕のある剥片	13 b・c	42.5	34.4	12.7	13.6	サヌカイト	両面調整
S 8	石錘	12 b	58.4	56.0	10.3	56.3	安山岩	
S 9	石錘	13 b	100.1	64.6	28.9	224.5	流紋岩質凝灰岩	
S 10	磨石	15 b	67.4	100.5	48.1	370.1	流紋岩	凹石としても利用

図46 弥生時代包含層（15～10層）出土遺物 3 石器（縮尺S 1～S 7：2/3、S 8～S 10：1/3）

第5節 古墳時代後期～中世の遺構・遺物

本体調査区において、中世層である8層によって削平された遺構群が検出された。層位と遺構内の遺物から、古墳時代後期～中世までの範ちゅうの遺構と考えられる。また、共同溝調査区北端部では、中世層において東西方向の溝を1条検出している。本節では、これら古墳時代後期～中世の遺構について概説したい。

ここで個別の遺構の調査成果を示す前に、当該期の検出遺構について、第27次調査地点との関連も含め、全体的様相を整理しておきたい。まず、本体調査区の東半部においては、南北および東西にのびる柵列が検出された。この柵列のピット内からは、古墳時代後期の須恵器小片が3点出土している。これらが柵列の時期を示す可能性もあるが、混入の可能性もあり時期を確定するには至っていない。なお、古墳時代後期の包含層は共同溝調

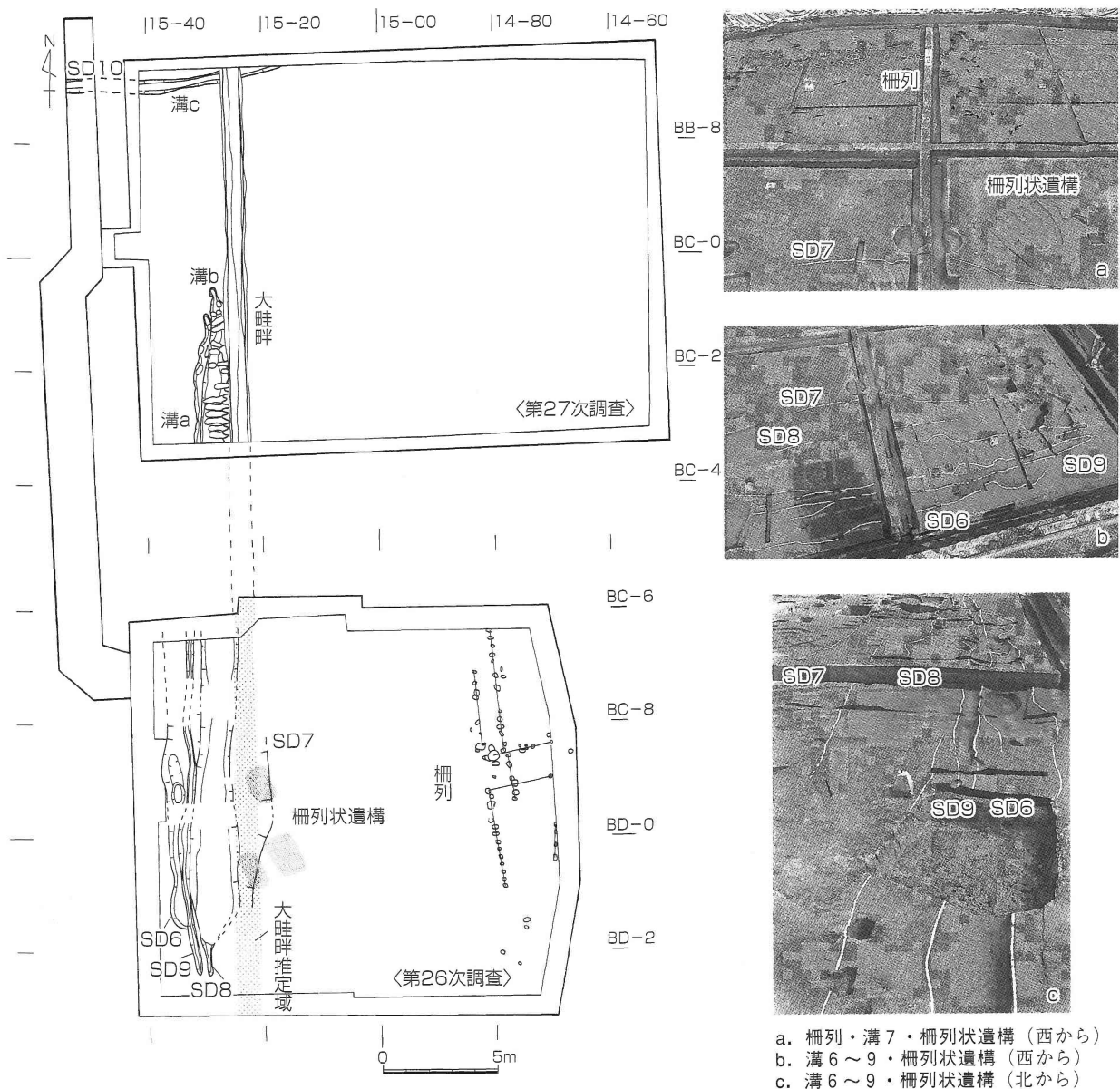


図47 古墳時代後期～中世検出遺構全体図 (縮尺 1/600)



図48 鋤溝検出状況（西から）

調査区において認められるが、本体調査区においては中世層によって削平を受けており、当時の生活面の多くは失われている。

一方、確実に中世段階の遺構と認定できるものとしては、本体調査区で南北方向の溝4条、鋤溝、共同溝調査区で東西方向の溝1条がある。中世段階には、造成によって土地の起伏が解消している。調査区全域に広がる4～8層が中世の包含層と考えられ、各包含層上面においては鋤溝が検出されている（図48）。なお、本体調査区においては、表土掘

削時に5層までを掘削していたため、平面的な調査を行ったのは6層上面からとなる。北壁西側の断面において5層上面に遺構の可能性がある埋土がみられるが、第27次調査においてはそれに続く遺構はみられず、現状では明瞭な遺構とは認識していない。

本体調査区西半で検出された南北方向の溝状遺構は、第27次調査地点における同時期かつ同様の遺構と連なるものである。断面形は底面に凹凸を有し、平面形も先細りとなるなど、通常の溝とは異なる様相を呈する。これらの溝が、旧地形における谷部の上面にほぼ位置することを勘案すると、道路などの造成のための基礎工事、あるいは土地改良の痕跡の可能性もあるだろう。こうした南北溝群の方向と先の柵列の方向がおおむね一致していることは、柵列が中世段階にまで下る可能性も示している。

南北の溝に切られる形で、近年道路に伴う可能性がある遺構として注目されている柵列状遺構も確認されている。ただし、調査当初は明確な遺構としては認識していなかった。南北溝とは方向を違えており、溝が作られる前の段階の道にかかわる基礎工事の跡である可能性がある。

第27次調査地点では、中世段階の南北方向の大畦畔が検出されている。これに関連する遺構については、本調査地点では表土掘削の関係で平面的な検出をなしていない。しかしながら、第27次調査の成果を受け、報告書作成の過程で調査区北壁・南壁を再検討した結果、それに対応する畦畔状の土層が確認された。

共同溝調査区北端で検出された東西溝は7b層の段階の溝であり、第27次調査における溝cと対応する。

以上をまとめると、本体調査区西半部では、①柵列状遺構、②溝状遺構、③大畦畔という3つの段階にわたって、何らかの道にかかわる構造物がつけられたものと考えられる。一方、西半の①または②の段階に対応する一時期に、東半部では柵列が築かれている。共同溝調査区の溝は、層序から②の南北溝が削平された後の時期で、かつ大畦畔が作られる以前の、耕作地を区画する溝であったものと考えられる。

a 柵列（図49～51）

検出面は、基盤層である17層上面及び10b層上面である。検出層位の検討の結果、中世層である9層によって上面が削平されていることが判明した。ピットはいずれも浅く、深さ10cmほどのものが主体である。埋土はいずれも灰白色の粘質土となる。時期の認定が問題となるが、ピット内の埋土中からは須恵器の小片が出土している（図48）。古墳時代のTK209型式ごろのものと考えられる。この須恵器が出土したピット以外でも、同時期のもと思われる須恵器甕小片が2点出土している。ただし、これらは混入の可能性もある。なお、調査区北側の

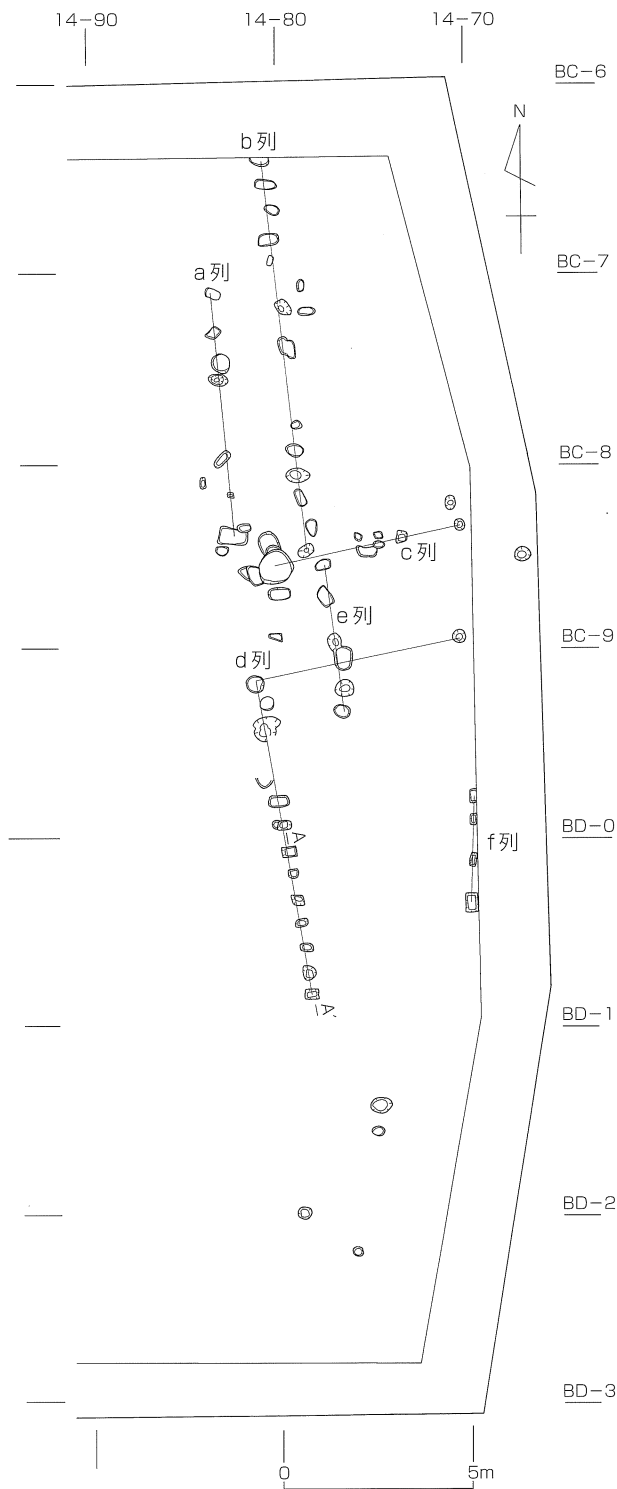
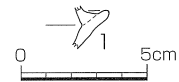


図49 古墳時代後期～中世検出遺構平面図1 (縮尺1/200)

このピットの周囲は、不定形なピットが切り合う状況となっており、他の列の端に比べると異なった感を呈する。何らかの扉状のものがあつた可能性もある。

d列はL字状にのびる。南北列は13基、東西列は3基のピットによって構成される。東西列のピットの数



番号	器種	形態・手法他	色調	胎土
1	須恵器 杯身	内外ナデ	淡青灰色	微砂

図50 柱穴内出土遺物 (縮尺1/3)

第27次調査地点では、この柵列に続くピットは検出されていない。

列として認識したのはa～fの6列である。a列は、7基のピットからなる。列の長さは、6.8mを測る。ピットの平面形は長方形が主体となるが、楕円形のものも含まれる。ピットの規模は、長さ30～50cm、幅20cm前後となる。断面形は、皿形が主体となるが、柱穴の掘り込み跡を有するものもみられる。深さは皿形ものが約10cm、柱穴を有するものが20cmほどとなる。

b列は、13基のピットからなる。a列と並行する柵列である。b列の長さは現状で10.5mとなる。ただし、北端については、側溝で切られているため、もう少し北側に続く可能性がある。ピットの平面形は、長方形と楕円形が混在する。規模は長さ30～50cm、幅20cm前後となる。断面形は皿形であり、深さ10cm前後となる。

c列は、a・b列の垂直方向へのびる柵列で約5基のピットからなる。この列は、位置関係からa列またはb列とともに、一連の柵列を構成するものと考えられる。列の長さは現状で6.1mを測り、東側の調査区外へも列がのびる可能性がある。また、この列に並行するように北側にもう一列存在する可能性がある。ピットの平面形はやや統一性に欠けるが、長方形や楕円形となる。規模は30cmほどの小型のものが主体である。その一方で、c列の西端はa列とb列の間にあたるが、この部分では平面形が大型のピットが作られている。規模は径90cmとなるが、断面形態については他と同様に浅い皿形となる。このピットの周囲は、不定形なピットが切り合う状況となっており、他の列の端に比べると異なった感を呈する。何らかの扉状のものがあつた可能性もある。

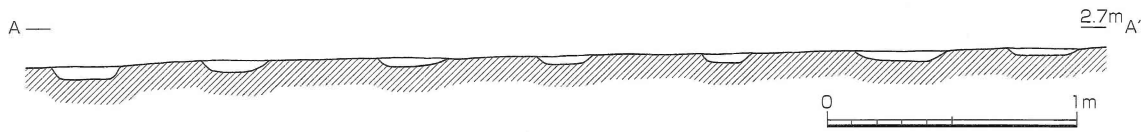


図51 柵列 d (縮尺 1/30)

ないが、この状況は並行する c 列と類似している。ピットの平面形は長方形を主体とするが、コーナーは円形となる。ピットの規模は長さ・径が20~60cmとなる。断面形はいずれも浅い皿形を呈する。

e 列は、c・d列に直交する南北列である。5基のピットからなる。長さは4.2mを測る。b列よりもわずかに東に位置する。d列の東西列のピットによって、本列のピットが切られているため、d列の構築以前に作られたものといえる。ピットの平面形については、長方形と楕円形が混在し、断面形は浅い皿形である。ピットの規模は、長さ・径60cmほどとなる。

f 列は、東側の側溝沿いに検出されたものである。現状では4基のピットしか認められなかった。列の長さは3.3mとなる。この列は、a・b列とは方向がいくぶん異なり、東に列の軸を振っている。ピットの平面形はいずれも長方形で、断面形は浅い皿形となる。ピットの規模は長さ35~40cm、幅20~30cm、深さ約10cmを測る。

いずれの列のピットも、深さや埋土が類似し、ほぼ同時期の所産であろう。こうした柵列の機能については、何らかの道や通路にかかわるものであると考えられる。a列とd列の南北列は、ほぼ直線をなしており、一連の計画的な配置がうかがえる。また、並行にのびるc列とd列の間は通路として機能していたものと考えられる。このようにみると、a・c・d列を、ひとまとまりの群として捉えることができる。一方、b列については、a列とともに通路を形成していた可能性もあるが、むしろe列とともに先行する柵列をなした可能性もある。調査区の西側には同様の遺構の痕跡は認められなかったため、これらの柵列に関連する何らかの施設が存在する場合には、それは本体調査区より東側に位置するものといえる。

b 柵列状遺構 (図52)

位置としては溝7付近において、溝に斜交しながら柵列状遺構がつけられていた。溝7によって切られているため、中世以前の所産である可能性がある。東西方向に細長く弧状の平面形をなすものが、南北に5基ほど連なり、ひとつの列をなしている。列は3箇所にグループをなして認められるが、その位置関係から、東西二列に並列してつけられたものと考えられる。1基分の規模は、長さ約300cm、幅約70cm、深さ約10cm

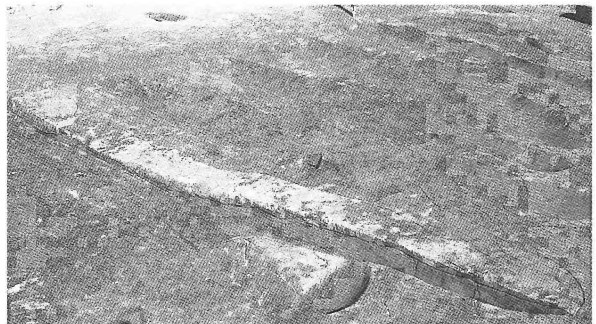


図52 柵列状遺構 (西から)

を測る。平面形は弧状を呈する。断面形は、浅い皿形となるが底面に凹凸が随所にみられる。埋土は灰白色砂質土であり、下面に鉄分が多く沈着していた。これらの柵列状遺構は、溝6~9が作られる以前の、道にかかわる遺構であると考えられる。本体調査区東半部で検出された柵列と一連のものとなる可能性もある。

c 溝 (図53~56)

本体調査区の南北溝6~9は、10cm前後の深さを基本とし、上面が削平された状態で検出されている。溝の埋土からは、中世土器を主体とする土器小片が出土した。上面の標高は約2.25mであり、底面が1.97~2.1mとなる。溝6~9の検出面は、10層に対応する面であり、上部は中世層の8層によって削平されている。切り合い

関係から、溝6・7→8→9の順で新しくなる。溝6・7の先後関係については、直接的な切り合い関係がないため不明である。第27次調査地点にも同様の溝群（以下では便宜的に溝a・bとする）が検出されている。それらの標高は、上面で約2.4m、底面で約2.2mとなる。したがって、平面形と標高において、両調査地点の溝群は一連のものともみなしてよい。両調査区における対応関係としては、第27次調査の溝bが溝8に対応するものと考えられる。溝aについては、確実に対応するものは本調査地点ではみられない。溝8・9によって失われた可能性がある。

共同溝調査区で検出された溝10は、東西方向にのびる溝であり、第27次調査地点においてもそれに連なる位置において溝cが検出されている。溝10は、上面の標高が2.55m、底面が2.30mを測る。一方、第27次調査地点における東西溝の検出レベルは、上面で2.6m、底面で2.4mを測る。したがって、平面位置と標高の双方において、両者を同一遺構とすることに矛盾はなく、東側から西側へと流れる溝であったと考えられる。

溝6（図53・54）

上面の標高は2.20～2.31mとなる。底面の標高は、北壁で1.97m、南端で2.03mとなる。溝8・9によって東側面が切られている。溝群中ではもっとも深い溝であり、調査区北壁で深さ28cmを測る。溝の長さは25.2mとなり、調査区南端付近で途切れている。溝の幅は、北壁

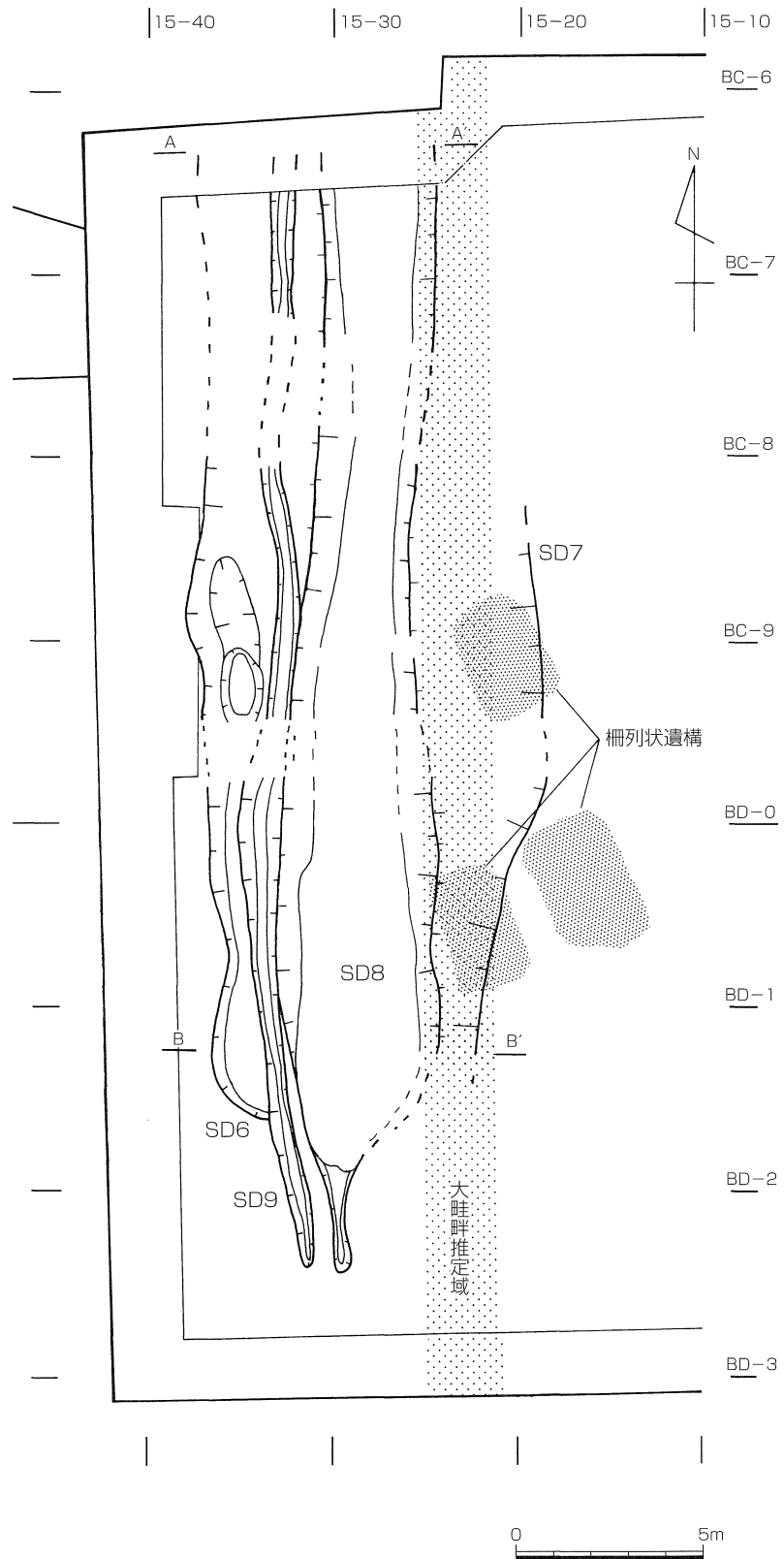


図53 古墳時代後期～中世検出遺構平面図2（縮尺1/200）

調査の成果

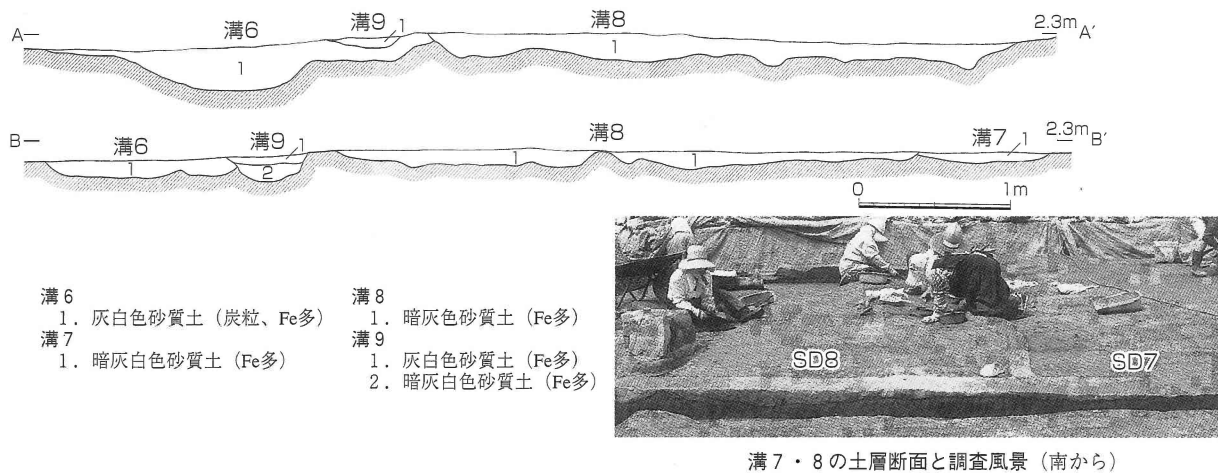
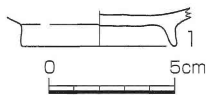


図54 溝6～9 (縮尺1/50)



番号	器種	法量 (cm)	形態・手法他	色調	胎土
1	土師質土器 椀	底径: (6.2)	内: ナデか、外: ナデ、底: 押さえ・ナデ、 1/3 残存	灰白色	微砂・細礫含む

図55 溝9出土遺物 (縮尺1/3)

部分で256cmを測り、これが本来の溝の広さを示すものと考えられる。埋土は灰白色砂質土である。溝6からは、中世土器の他、弥生時代・古墳時代・古代の土器小片が約30点出土しているが図化に耐えうるものはみられない。

溝7 (図53・54)

上面の標高2.23m、底面の標高2.15m、深さは8cm前後となる。溝8によって西側面が切られている。平面では、北側と南端の外郭ラインが途切れている。北壁と南壁の断面においても、本溝の埋土は確認されていないため、途中で溝が途切れている可能性が高い。溝の長さは14m、最大幅3.3mを測る。断面形は浅い皿形となる。埋土は暗灰白色砂質土である。埋土中から少量の土器小片が出土している。なお、溝7に斜交する方向に、柵列状遺構が認められた。これらは、本溝によって切られている。

溝8 (図53・54)

上面の標高2.30m、底面の標高2.11m、深さは19cm前後となる。溝9によって一部の西側面が切られている。溝の長さは29.6mを測る。幅は主な部分で3.2～4.1mの範囲内となるが、南端部分では急激に狭まり、幅8cmほどとなる。断面形は皿形であるが、底面に凹凸がみられる。平面位置から、第27次調査地点における大畦畔西辺の溝bに連なるものと考えられる。この溝においても北端の溝先端部分が尖るように狭くなっており、溝8と共通する特徴といえる。埋土は暗灰色砂質土となる。埋土中からは中世・古代・古墳時代の土器小片約45点が出土している。

溝9 (図53～55)

上面の標高2.28m、底面の標高は北壁で2.11m、南端で2.04m、深さは5～15cmとなる。溝6・8を切って作られている。長さは29.4m、幅は溝群中でもっとも狭く、55cm前後となる。断面形はU字形を呈する。本溝については、形状から通常の水路としての溝と考えられる。埋土は2層からなるが、いずれも灰白色系の砂質土

からなる。埋土中からは、中世を中心に土器小片が約20点出土している。図55は、中世前半の土師質土器碗の底部片である。

溝10 (図47・56)

共同溝調査区北端に位置する。7 b層において検出した。第27次調査地点における溝cと連続する溝である。上面の標高は2.55m、底面が2.30mとなり、深さ25cmを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は一層からなり、灰白色砂質土である。出土遺物はみられなかった。

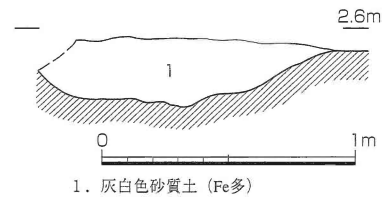
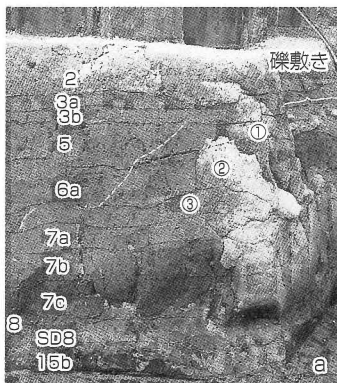


図56 溝10 (縮尺 1/30)

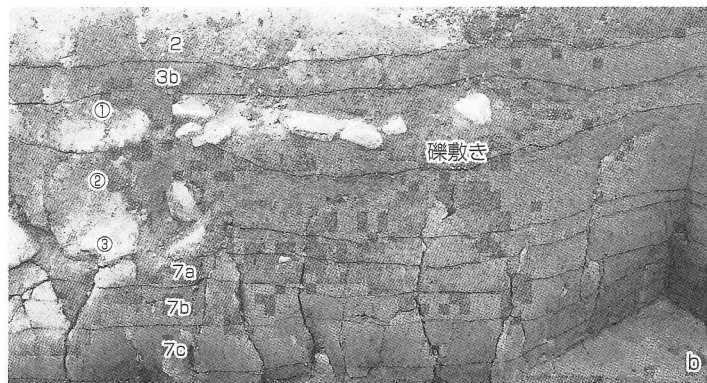
d 畦畔 (図57)

第27次調査地点において南北にのびる大畦畔が検出されたが、それに対応する畦畔が、調査区北壁 (図58、土層図は図7-A 1 断面東端・A 2 断面西端を参照) と南壁において認められる。なお先述したように、本調査地点においては表土掘削の深度により、平面調査時には畦畔の多くは失われていたため、そのプランを確認することはできなかった。

畦畔は少なくとも5層と6 a・6 b層の三つの段階にわたって作られていることが、土層の記録から想定される。畦畔の幅は約1.5mを測る。北壁においては、最も新しい5層段階の上面に、礫を多く含む土層がみられる。これに対応する層は、第27次調査地点の南端部においても確認されており、一連の畦畔上を覆う礫敷きをなすものと考えられる。礫の平面的な範囲は判然としないが、南壁には認められないため、本体調査区の中で途切れたものと考えられる。



a. 南から



b. 西から

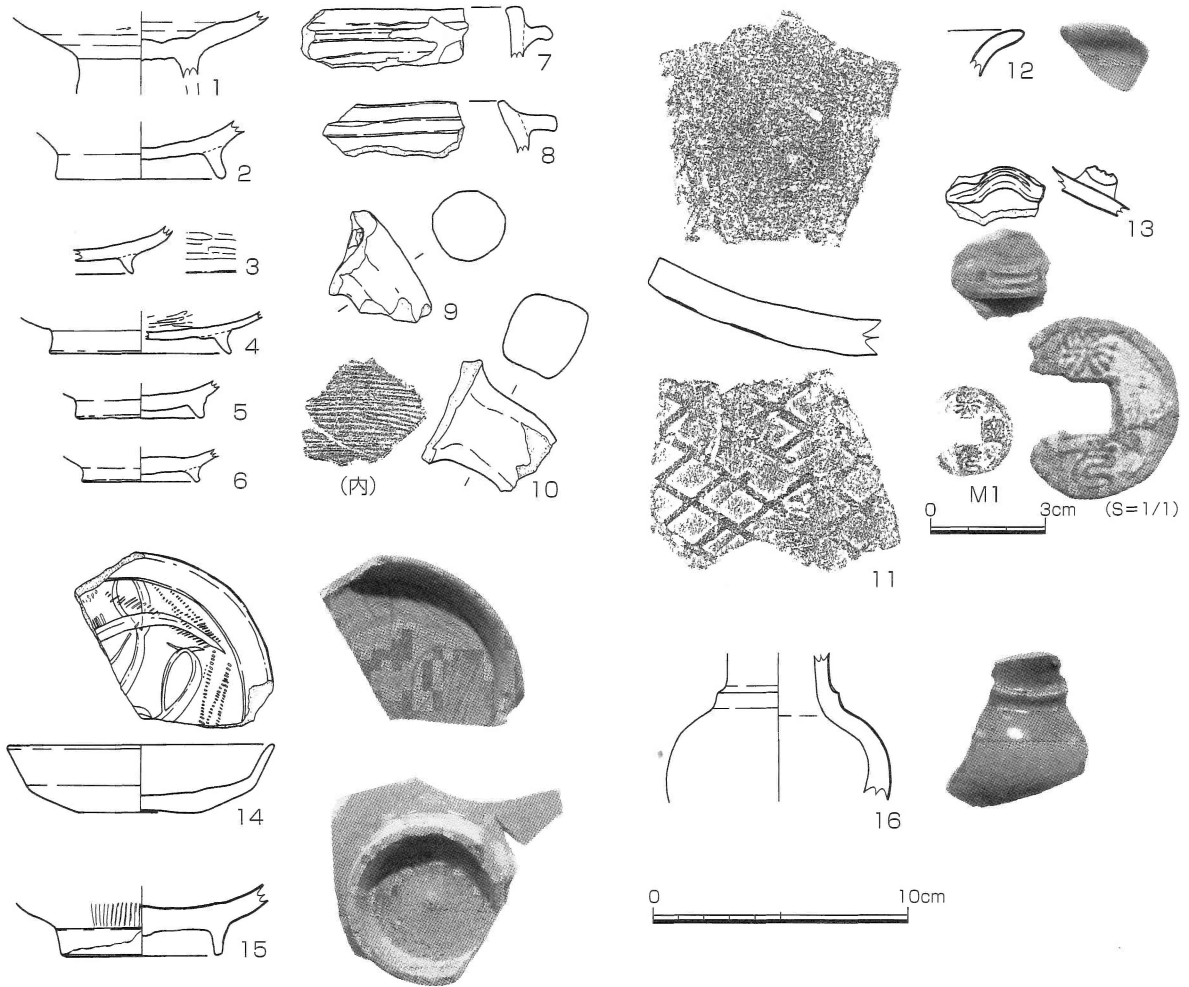
- ① 5層段階
畦畔
- ② 6a層段階
畦畔
- ③ 6b層段階
畦畔

図57 畦畔の土層 (北壁断面)

e 包含層出土遺物 (図58)

古墳時代後期から中世までの包含層である4～9層中から出土した遺物について述べたい。出土量は、包含層全体でコンテナ一箱分の土器が出土している。土器の多くは中世土器の細片であり、各層に鋤溝がみられたことを考えると度重なる耕作によって土器が小片化したものと推測される。出土土器の中には、古墳時代後期の須恵器や古代の黒色土器なども少量ながら含まれている。古代の包含層については確認されていないが、本来は古代の包含層が存在していたものが中世段階に削平されたものと考えられる。また、特に8層を中心に、縄文時代から弥生時代の石器も含まれていた。このことは8層が中世段階の造成によって形成された土層であることを示している。なお、本来の土層から遊離した縄文時代から弥生時代の石器については第7節において概説することとし、ここでは当該期の包含層の時期を示す遺物について示したい。

調査の成果



番号	器種	出土層位	法量 (cm)	形態・手法他	色調	胎土
1	須恵器 高杯	8層	—	内: 回転ナデ、外: ヘラ削り、脚: 回転ナデ、1/1 残	青灰色	微砂
2	須恵器 椀	8層	底径: 6.7	内: ナデ、外: ナデ、底: 弱いナデ、1/1 残	青灰色	細砂
3	黒色土器 椀	7層	—	内: 風化、外: ヨコミガキ、底: ナデ、1/6 残	黒色、暗茶褐色	微砂
4	土師質土器 椀	8層	底径: (7.2)	内: ミガキ、外: 弱いナデ?、高台: ナデ、底: 弱いナデ、1/3 残	灰白色	微砂
5	土師質土器 椀	8層	底径: 5.1	内: ナデ、外: ナデ?・爪の跡?、底: ナデで押さえ、1/1 残	淡灰黄色、淡灰褐色	微砂
6	土師質土器 椀	6・7層	底径: 4.6	内: ナデ、外: ナデか、底: ナデ、3/4 残	暗灰色	微砂
7	瓦質 釜	8層	—	ヨコナデ	淡黒灰色	微砂、黒雲母片含む
8	瓦質 釜	8層	—	ヨコナデ	淡黒灰色	微砂
9	土師質 支脚	8層	—	内: ヨコハケ目	暗茶褐色	細砂
10	土師質 支脚	8層	—	全体に風化	灰色、淡灰黒色	微砂
11	平瓦	溝11	—	内: 格子目タタキ・風化、外: タテナデ・ヨコナデ、外縁: シヤープなナデ	暗灰黄色	細砂
12	青磁 壺	6層?	—	内・外: 釉	釉: 淡緑灰色	微砂 緻密
13	白磁 四耳壺	6・7層	—	全面施釉・ナデ	釉: 淡緑灰色	微砂
14	青磁 皿	8層	口径: (10.5)、 底径: (4.8)、高: 2.7	内・外: 施釉、内: 文様、底面露胎、1/3 残	釉: 淡緑灰色 露胎: 灰褐色	微砂
15	白磁 椀	8層	口径: 6.4	内: ロクロナデ・釉薄い、外: ロクロナデ・成形痕残る、脚: 一部に釉かかる、高台内露胎、3/4 残	釉: 淡灰緑色 露胎: 暗灰白色	微砂、細塵含む
16	青磁 壺	6層?	—	内: ナメナデ・ロクロナデ・釉なし、外: 釉、1/4 残	釉: 茶褐色、 露胎: 淡緑灰色	微砂 緻密

番号	器種	出土層位	径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	特徴	材質
M1	銭	8層	24.0	1.4	(1.8)	熊寧元宝 (1068年)	銅

図58 古墳時代後期～中世包含層 (9～4層) 出土遺物 (縮尺 1～16: 1/3、M1: 1/2)

1・2は須恵器である。1は高杯で、焼成が良好であり、古墳時代後期のものと思われる。2は、須恵器椀の高台部である。3は、黒色土器の高台付椀の底部小片である。4～6は、高台付土師質土器椀の底部片である。4が12世紀代、5・6が14世紀代のものと考えられる。瓦質釜 (7・8) や土師質鍋の支脚 (9・10) も出土し

ている。11は古代の平瓦である。近世溝から出土しているが、包含層からの巻き上げであろう。中世の輸入陶磁器も散見される。12・14・16は青磁、13・15は白磁となる。13は四耳壺の肩部片で、12～14世紀代のものと考えられる。14は同安窯系の皿で、器形から12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

M1は、一字分欠損しているが宋銭である。灑寧元宝（初鑄造1068年）に該当するものと考えられる。

第6節 近世・近代の遺構・遺物

近世・近代の遺構は、溝5条、土坑31基からなる。ただし本体調査区においては、表土掘削時に近世層（3層）を除去していたことにより、近世層上面における平面的な調査は調査区四周の土層観察用土手に限定され

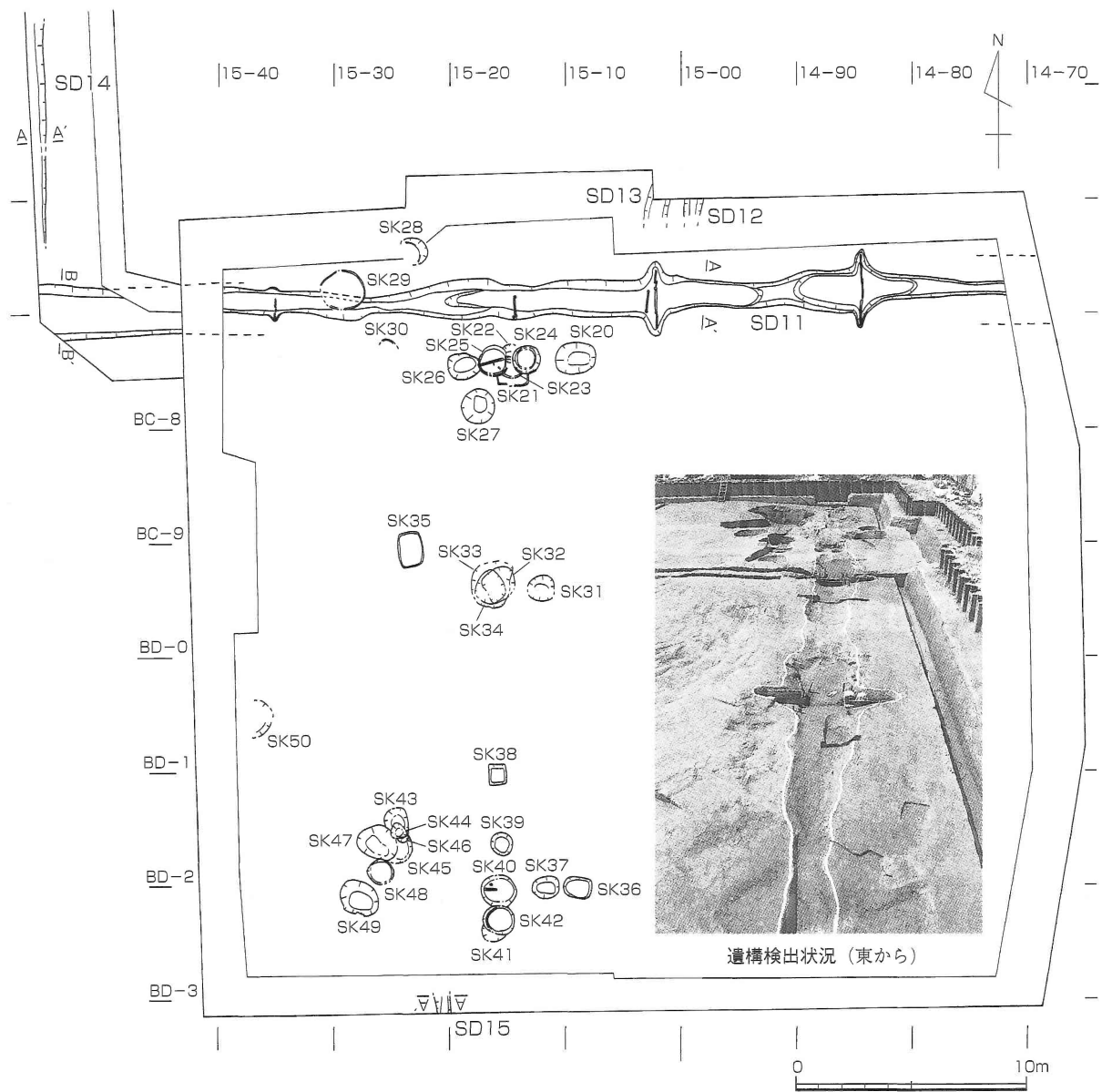


図59 近世・近代検出遺構全体図（縮尺1/300）

る。多くの遺構は6層段階で検出されたものであるため、遺構上面のレベル等については判然としないものが多いことをあらかじめ明記しておきたい。

溝は、本体調査区北辺および共同溝調査区南端で検出された大型の東西方向の溝11を中心に構成される。溝11は、4基の水門を有し、杭列によって護岸がなされた溝である。この溝には、耕作地への取水溝としての機能が想定される、相対的に小型の溝12~14が接続するものと考えられる。こうした溝11は、耕作域を区画する基準としての性格が考えられる。溝11は、最終的に造成土によって埋没しており、近世から明治期の造成直前まで機能していた。南壁土手においては、南北方向に伸びる溝15を検出した。これに対応する溝は、北壁では認められないため、溝11にとりつく可能性がある。この南北ラインは、中世段階の大畦畔が築かれていた場所に相当するが、その両脇に土坑群が築かれている。土坑群は、溝14の南北ラインのほかに、溝11沿いなどにも築かれている。こうした溝と土坑の配置は、当時の区画された耕作域の景観を物語るものと推定される。

a 溝

溝11 (図60~66)

本溝は、BC-7ライン上に東西方向にのびる大型の溝で、4基の水門と杭列を有する。溝からはコンテナ3箱分の近世遺物と少量の近代遺物が出土している。溝の長さは43mを測り、東西の調査区外へと続いている。溝上面の平面的な調査は共同溝調査区において3層上面から行ったが、本体調査区では溝の上半部の多くが表土掘削時に失われていたため中世層(6層)における上面検出となった。検出面が低かったことにより、水門や杭列の上部は基本的に欠損した状態であるが、特に水門3・4が存在する本体調査区西半部は掘削が深めに及んだため、溝と水門の状況が不明瞭なものとなった。

当時の掘り方の全体が判明する箇所では上面の標高についてみると、溝西端で2.98m、東端で3.07mを測る。また、底面のレベルは水門周辺で深くなるが、本体調査区東壁で2.60m、共同溝調査区で2.34~2.47mとなる。全体としては、東から西方向へ流れる溝と考えられる。幅は調査区東壁で3.0m、西端で2.4mを測る。溝の中軸は、東西を軸に北へ3度振れる。

溝の断面形はおおむね逆台形状を呈する。溝の堆積状況について、まず西端に位置するB断面をみてみたい(図61)。B断面では、大別して1~6層(新段階)と7~14層(古段階)に区分することができる。まず、古段階についてみてみよう。この段階は、土質からさらに下層(12~14層)と上層(7~11層)に分けることができる。下層は粘土層であり、もっとも古い時期の溝の使用に堆積した土層と考えられる。それに対し、上層は洪水砂と考えられる粗砂からなる。この洪水砂によって、古段階の溝が埋まったものと考えられる。新段階の土層は1・3・5層が基本層序1層である造成土、他の2・4・6層も砂礫を多く含む土層からなる。これらの層は、明治期の陸軍による造成の段階において、溝を埋め立てる過程で堆積したものと考えられる。また、新段階の断面ラインは、古段階の溝を再掘削した際に生じたものと捉えることができる。この新段階の溝が掘削された際の遺構面については、2層(近代層)段階が該当するものと考えられる。本体調査区東壁(図8-B断面)では、溝全体が造成土によって埋め立てられた状況がみられ、南側の肩が2層上面にまで達していることから、最終的には明治期の造成直前まで使用されたものと考えられる。新段階の溝は、B断面においては古段階よりも若干南に寄っている。この段階の溝がどのようにのびるかは判然としない。造成土によって埋まった土坑29が新段階の溝の北辺に位置する可能性もあるが、溝ののび方から考えるとこの土坑は溝の廃絶後につくられたものである可能性もある。一方、東壁で溝が造成土によって埋まっていることから、東側においては溝幅が広くなるものと推定される。

B断面14層が堆積する箇所は、底面が深く抉れている。水門1~4では水門の前後の底面が深くなっており、溝14が取り付く部分にあたることを考慮すると、西の調査区外に水門が存在する可能性が高い。

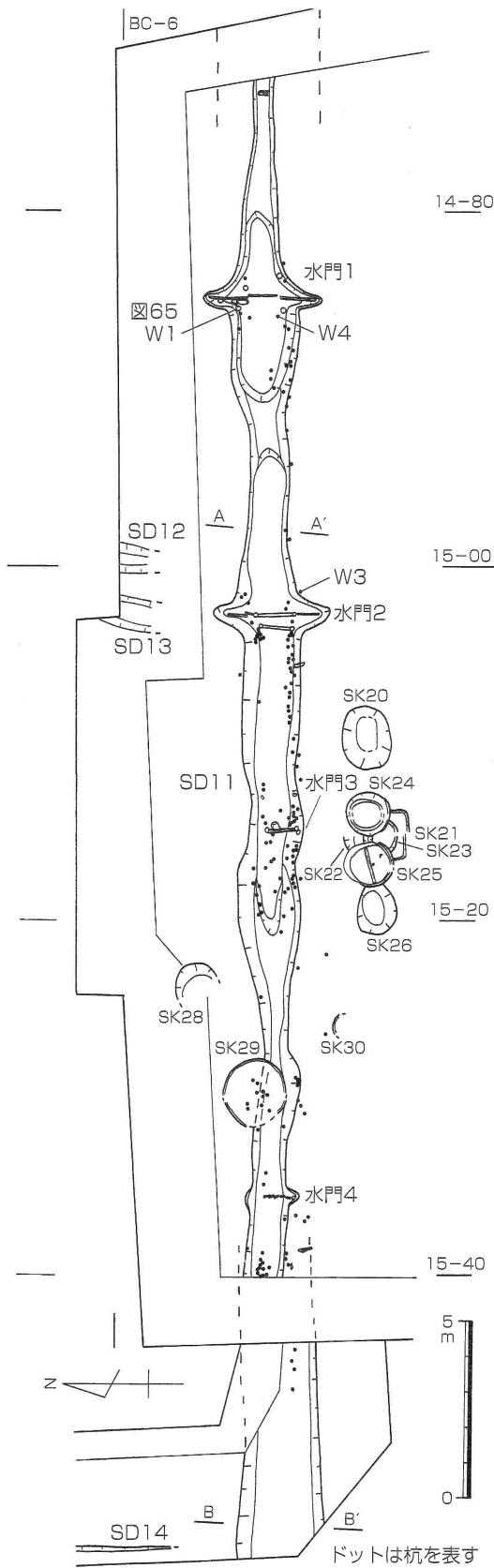
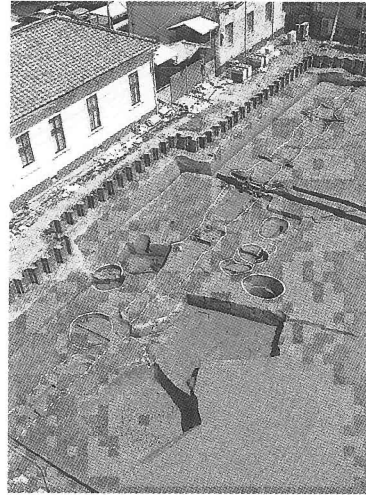
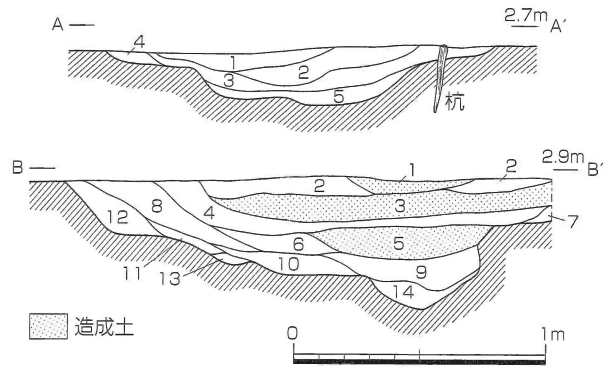


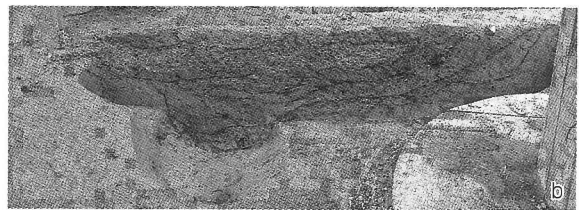
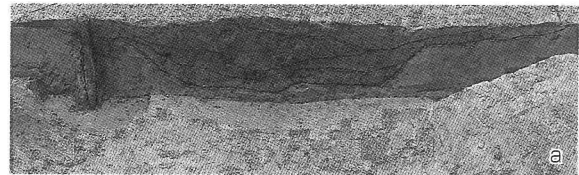
図60 溝11~14 (縮尺 1/200)



溝11と土坑群
(西から)



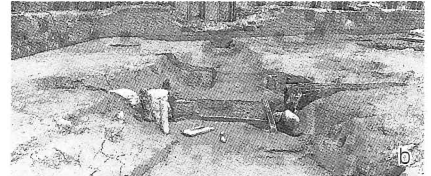
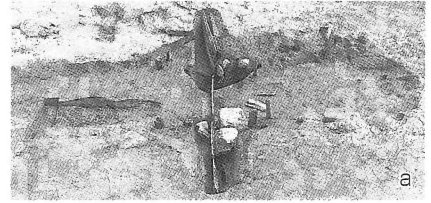
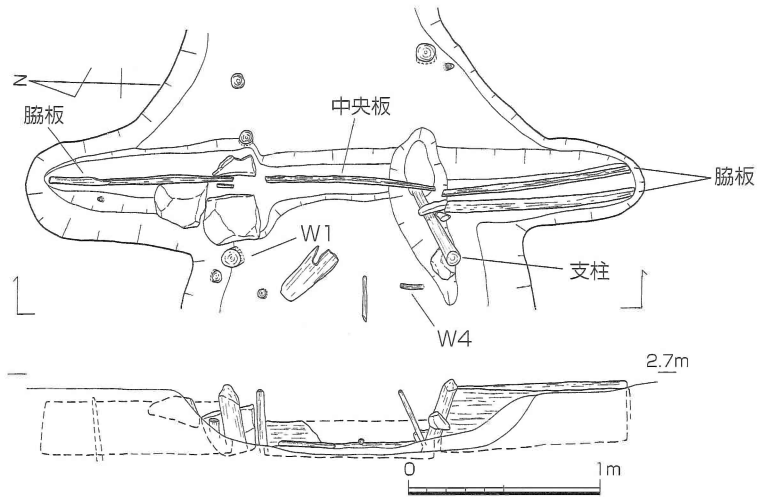
- | | | |
|----------------------------------|---------------------|-----------------|
| A断面 | B断面 | |
| 1. 暗緑灰色粗砂
(粗砂ラミナ状) | 1. 造成土 | 8. 白灰色粗砂 |
| 2. 暗緑茶褐色粗砂
(木質僅か) | 2. 灰褐色砂礫土 (粗砂多) | 9. 黄灰色砂質土 (細砂多) |
| 3. 暗緑褐色弱粘質土
(木質僅か) | 3. 造成土 | 10. 灰色粗砂 |
| 4. 明緑灰色細~粗砂
(細~粗砂ラミナ状) | 4. 淡青灰色粗砂 (礫多) | 11. 灰色粗砂 |
| 5. 暗緑茶褐色弱粘質土
(細砂ラミナ状、粘土ブロック多) | 5. 造成土 | 12. 灰色粘土 (Fe多) |
| | 6. 暗褐色砂礫
(礫・粗砂多) | 13. 灰色粘土 |
| | 7. 白灰色粗砂 (Fe多) | 14. 灰色粘土 (粗砂多) |



a. A断面 (北から) b. B断面 (北から)

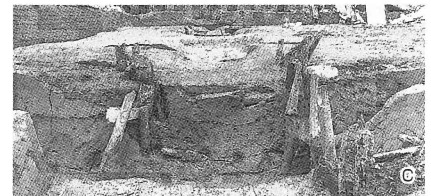
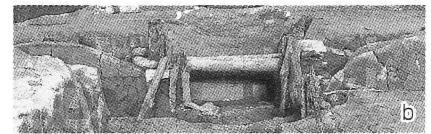
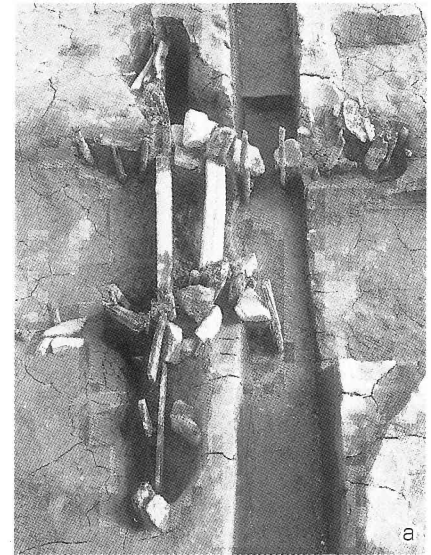
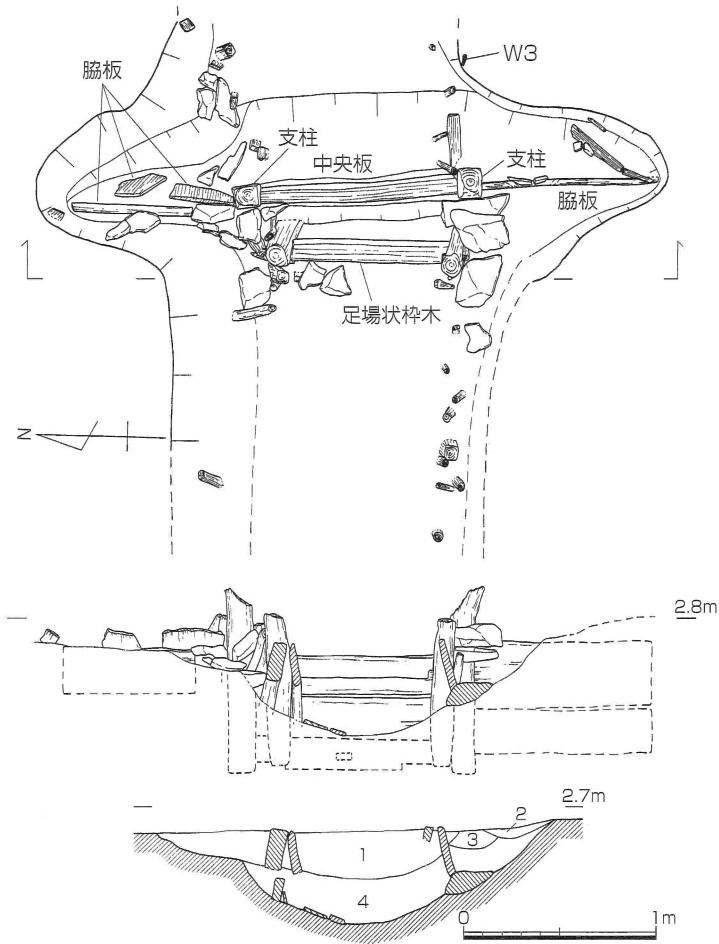
図61 溝11 (縮尺 1/30)

調査の成果



a. 完掘プラン (北から) b. 立面 (西から)

図62 水門1 (縮尺 1/40)



a. 完掘プラン (北から)
b. 立面 (西から)
c. 土層断面 (西から)

- 1. 暗緑灰褐色砂質土 (粗砂ラミナ状)
- 2. 暗褐色腐植土 (植物遺体多)
- 3. 暗緑青灰色粘質土
- 4. 暗灰褐色砂質土 (植物遺体多)

図63 水門2 (縮尺 1/40)

A断面は上層部分が失われているが、土質と堆積状況から1・2層と3～5層に区分することができる。前者は粗砂からなるのに対し、後者は粘質土を中心とする。1・2層はB断面の古段階上層、3～5は古段階下層に対応するものと考えられる。この断面箇所でも底面が一段低くなり、水門2に向かってごく緩やかに傾斜する。

本溝では9～15mの間隔で水門が築かれている。水門の間隔は、1～2間が13m、2～3間が9m、3～4間が15.4mを測る。各水門の構築状況について以下で検討したい。

水門1 (図62) BC14-86・87区に位置する。検出した水門の上面は標高約2.65mとなり、本来の溝上面から約30cm下となる。この水門1と2 (図63)は、構築方法が類似している。水を堰き止める部分は、南側に門の支柱となる丸木杭が埋め込まれており、そこから北へ約70cmの部分に大型の石によって中央の横板 (以下、中央板と呼称) を固定するかたちで作られている。丸木杭は中央板の西面に位置し、北側の石も西側の方に大型の石が配置されており、東側からの水流に備えた構造となっている。支柱部分全体の幅は115cm、支柱間の幅は80cmを測る。中央板は、溝底の一枚分のみが残存していた。その幅は90cm、長さ20cm、厚さ4cmを測る。水門2を参考にすると、本来は上部に3枚以上は中央板が渡されていたものと考えられる。中央板は可動式と推定されるが、残存していた横板の下面は溝の底面よりも深くなっており、この板に関しては据え付けられていた可能性もある。支柱の外側には、幅95～100cm、長さ30cm、厚さ4～5cmの横板 (以下、脇板と呼称) が設置されている。脇板は北側が1枚であるのに対し、南側は2枚を重ねて、いずれも大部分が土中に埋め込まれた状態となっている。これらの脇板の機能としては、水門の脇から水が流れ出ることを防ぐことと、水門の支柱が倒れないように補強する意味合いがまず推測される。また、溝上面のレベルが約3.0mであることを考えると、上部にもう1枚分の脇板が設置されていた可能性がある。その場合の脇板は、水を受ける板の面が広がるものと考えられ、水を堰き止めて外へ水を導く機能を果たすものと考えられる。

水門2 (図63) もっとも残存状況のよい水門で、BC15-06・07区に位置する。この箇所では、水門とその西側に足場状の柵木が作られている。まず水門については、溝中央に設置された門の部分と、水門1と同様に北側と南側に埋め込まれた脇板によって構成される。門の部分は、角材による支柱と、その間の中央板からなる。支柱は、北側が現存長90cm、厚さ10～13cmの断面長方形、南側が現存長90cm、厚さ12～15cmの断面長方形となる。地中に約30cm埋め込まれている。支柱間の幅 (外寸) は、124cmとなり、中央板の部分の幅が106cmを測る。いずれも下端面が平坦であることが特徴的であり、水門1とは異なり溝に打ちつけられたものではなく、掘り方内に据え付けられたものであることを示している。支柱の西側には大型の石が配置されており、東からの水の流れによる水圧に配慮した造りとなっている。支柱の中央板側と脇板側には、縦方向に幅3cm、深さ1.5cmのレール状の溝が彫られており、中央板及び脇板との結合を強固なものとしている。

中央板としては、3枚の横板が残存する (それぞれ上・中・下段と呼称)。上段と下段は、レール状溝とは別に支柱に穿たれたほぞ穴にはめ込まれており、固定された状態であったことを示す。一方、中段は支柱のレール状溝にはめ込まれただけであるため、これについては着脱が可能であったかもしれない。個々の板についてみると、まず下段は全体が溝の底面よりも下位に位置している。水門の柵木の一部として、水門を地面に固定する役割をもつ板であると考えられる。幅129cm、長さ16cm、厚さ8cmを測る。下辺が凸形に加工されており、かつ中央に長さ7cm、幅4cmの長方形のほぞ穴が作られている。中段は、脇板と形状が類似する通常の平たい板である。幅102cm、長さ22cm、厚さ2cmを測る。上段は、幅121cm、長さ22cm、厚さ9cmを測る。この板には、北端と南寄りにそれぞれ幅10cm、長さ4cmの横長のほぞ穴が穿たれている。これらのほぞ穴は、補修材によって埋められている。上段と下段の板については、ほぞの存在から転用材である可能性があるが、水門の構築にあたって加工された可能性もある。

脇板は南側で上下に2枚、北側で横板1枚と縦板2枚からなる。南側は幅90cm、長さ22cm、厚さ2.5cmの板の上に、幅90cm、長さ35cm、厚さ2.5cmの板が載っている。いずれも支柱のレール状溝に短辺がはめ込まれて

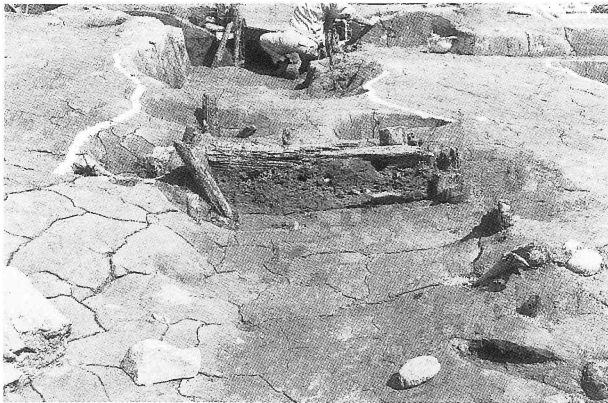
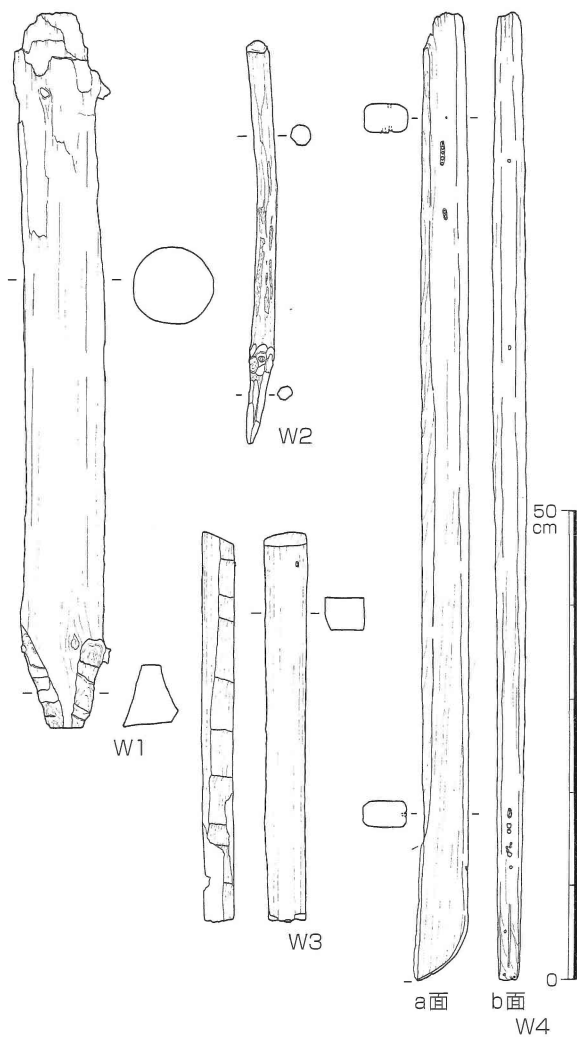


図64 水門3 (西から)



いる。下の板については溝の断面外郭ラインの外に位置するため、中央板の下段と同様に、水門を地中に固定するためのものと考えられる。上方の板は、一部溝内に露出するため、支柱を固定するための機能とともに、水の流れを堰き止める働きを担っていたと考えられる。一方、北側の脇板は、縦板が支柱のレール状溝に組み合わせるように差し込まれており、その縦板を西側から支えるように横板が埋め込まれている。2枚の縦板は、水門脇の水の流れを堰き止める機能を有していたものと考えられる。堰き止められた水は、北側に溝11とほぼ直交する方向に伸びる溝12・13に流されたものと推定される。溝12の底面は標高2.64m、溝13の底面は標高2.32mであるため、底面の高い溝12に水が流れていた場合、脇板も含めた水門全体が溝上面まで本来存在していたものと思われる。南側の脇板によって南側にも水が流された可能性があるが、溝状遺構は検出しえていない。

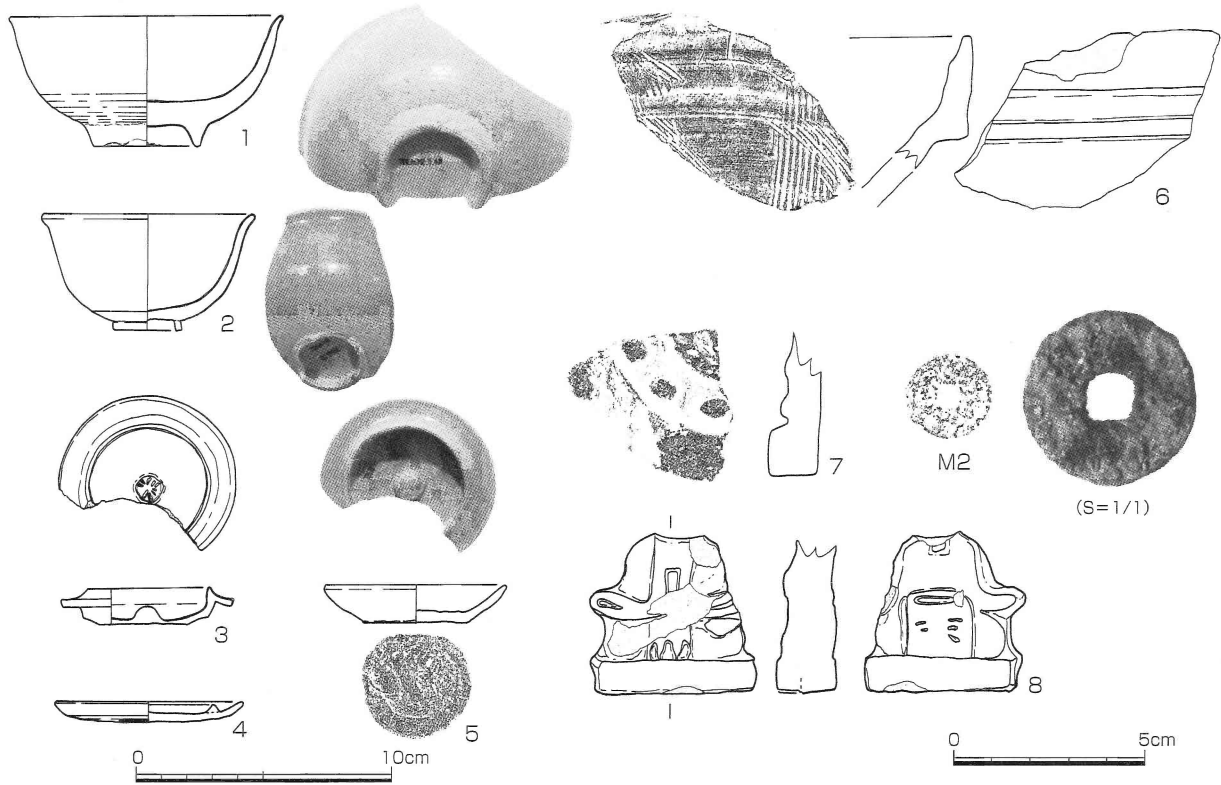
足場状枠木は、全体の幅95cm、現存高80cmを測る。支柱となる2本の丸木杭の間に、足場状の横木が渡されている。支柱は、丸木の先端を尖らせた杭であり、両側とも径約13cmを測る。横木は、上面が平坦に加工されていることに特徴があり、上面幅13cmを測る。支柱に穿たれたほぞ穴に横木が装着されている。付加的に作られた水門である可能性も検討したが、横木と全体の形状、中央板が出土していないことから、水門2を管理する際の足場と判断している。

水門3 (図64)・水門4 水門3・4は、先述したように表土掘削が深めに及んだことにより、検出しえたのは溝底面付近の水門の痕跡である。水門3はBC15-16区に位置する。残存していた部分は支柱と中央板からなる。水門の全体の幅は100cmを測る。水門1・2にみられる脇板及びその掘り方は認められなかった。

一方、水門4はBC15-36区に位置する。溝底面の

番号	器種	出土位置	法量 (cm)			特徴
			最大長	最大幅	最大厚	
W1	杭	水門1	(74.6)	9.6	9.6	枝払い8箇所、表皮なし、杭先三面加工、先端をカットしている
W2	杭	水門3-4間	(42.1)	2.1	2.1	枝を杭にしている、一部に表皮が残る、杭頭欠損
W3	杭	水門2	(40.7)	4.4	3.4	転用材、切断されている、杭先欠損、鉄釘残る
W4	杭	水門1	(105.1)	5.0	3.6	転用材、一部欠損、a面:木釘8箇所、b面:木釘11箇所・杭先に鉄釘2本、a面の裏面:上部付近に木釘15箇所、b面の裏面:釘なし

図65 溝11 出土遺物1 杭 (縮尺1/8)



番号	器種	法量 (cm)	形態・手法他	色調	胎土
1	灰軸陶器 椀	底径: 4.2、高台高: 0.9、 全高: (5.2)、口径: (10.8)	内: 施釉・一部露胎(重ね焼きの痕)、外: 施釉・回転ヘラナデ(3mm/本)、高台底面: 露胎	釉: 灰白色、露胎: 淡灰黄色	微砂・均質
2	京焼 椀	口径: (8.4)、高: 4.65、 底径: 2.8、高台高: 0.6	内・外: 施釉、高台底: 角をなす、底面露胎	釉: 灰緑白色、露胎: 灰白色	微砂・均質
3	蓋	径: 6.9、口径: 4.8	内: 施釉、外: 回転ナデ・回転ヘラ削り	釉: 淡灰緑色、露胎: 灰色	微砂・均質
4	備前焼 灯明皿	口径: (7.5)、高: 0.8	内: 回転ナデ、外: 回転ナデ・回転ヘラ削り	暗茶褐色	微砂・均質
5	土師質土器 小皿	口径: 7.2、高: 1.5、底径: 4.2	内: ヨコナデ・指押しえ、外: ヨコナデ、底: 糸切り痕	灰黄白色	微砂
6	備前焼 搦鉢	—	口クロナデ、内面に卸目	暗赤褐色、灰褐色～暗赤褐色	微砂・均質
7	軒丸瓦	瓦当径: (12.8)、外縁幅: 1.8、 外縁高: 0.7、瓦当厚: 1.3	内: ナデ、外: 巴文?・珠文	灰白色	微砂
8	土製人形	高: (4.2)、幅: (4.4)	頭部・腕?欠損	淡橙褐色	微砂

番号	器種	径(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	特徴	材質
M2	銭	23.0	1.4	2.0	寛永通宝、錆化著しい、「永」の一部残存	銅

図66 溝11出土遺物 2 土器・陶磁器・金属器 (縮尺 1～7: 1/3、8・M2: 1/2)

支柱の痕跡のみが検出された。支柱となる大型の杭の存在と掘り方から、水門と判断している。水門の規模は、幅90cmを測る。水門3と同様に、脇板にあたる構造は認められない。このようにみると、残存部分が少ないため明確ではないものの、水門3・4は水門1・2のように地中に脇板を埋め込むという構築方法を採用しない構造であった可能性が高いものと考えられる。

杭列(図60・65) こうした水門とともに、本溝を特徴付ける構造物として杭列がある。約160本の杭を検出した。杭は上部を欠損しているが、地中に30cm前後打ち込まれているため、杭の分布については当時の状況を示すものといえるだろう。杭の分布状況をみると、全体的には溝の南側に多いものといえる。詳細にみると、水門1～水門3の西側までの間と、水門4西側において、連続的に1～2列の杭が溝南側に打ち込まれている。これらは、溝の護岸として機能していたものと考えられる。水門1・2と水門4近辺においては、溝の南側と対になるように北側にも杭が打たれている。また水門3の西側には、溝の北側と中央付近にも杭が打たれている。これらについては水門の補強や、南側の杭とともに作業場を構成するものであった可能性がある。

出土した杭は、断面円形のものが大半であるが(図65-W1・W2)、一部に断面四角形の転用材と考えられ

調査の成果

るもの(W3・W4)が少数存在する。杭は現存長が20~110cm、径(幅)は2~10cm大までの範ちゅうに収まる。W1は、水門1の支柱石の背後に打ちこまれた杭で、支柱の構造を補強するためのものと考えられる。出土した中では比較的大型の杭であるが、形状は一般的なものである。先端の加工は、まず垂直に横断された後に、3面が削られている。完全に尖るように削られていないため、先端は平坦なままとなっている。本溝の杭の大半は先端が尖った状態のものであるが、W1同様に先端に平坦面がのこる杭は合計17点認められた。W2は、水門3~4の間に打たれたもののひとつで、最も細いタイプの杭である。W3は、水門2近辺で杭として使用されたものであるが、鉄釘が打ち込まれた状態の角材で、転用材と考えられる。同様の角材は水門2において5点、水門4において1点確認される。W4は水門1において杭として利用されていたが、一方の端部がカーブする部材である。同様のものは出土しておらず、元の部材の機能については不明である。木釘が部分的に集中して打ち込まれており、カーブする側面には鉄釘が2本打たれている。

また本溝からは、幕末の陶磁器を中心とした遺物が出土している⁽¹⁾(図66)。掲載遺物の主な年代をみると、6の16世紀末が古く、7の軒丸瓦が17世紀後半~18世紀、1が18世紀、2・4が幕末(19世紀)頃となる。全体としては17世紀の遺物がほとんどみられない。8は、土製人形であり、仏具関連であろう。M2は錆化が著しいが、寛永通宝と考えられる。出土遺物の大半は溝底面付近の土層から出土しているため、本溝の古段階に属するものといえる。したがって、古段階における使用の画期が幕末の時期にあるものと考えられる。

以上のように、溝11の構造とその出土遺物について概説してきた。津島岡大遺跡における近世の条里の復元研究では、検出された南北方向の道を基準に109m四方の条里区画が復元されている⁽²⁾。東西方向の区画については、条里関連の遺構が溝しかないため、あくまで参考として提示されているが、本溝はその復元された東西区画に一致している。したがって、本溝は津島岡大遺跡における近世条里の東西の坪境に位置し、条里区画に関連する溝であったものと考えられる。水門1・2にみられる規模の大きな水門が築かれ、かつ杭列によって溝の補強がなされているのは、地域社会における本溝の重要性に起因するものと考えられる。

註

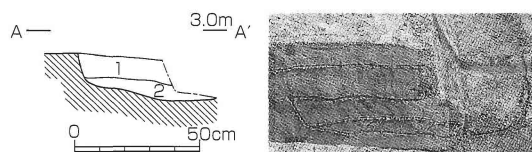
- (1) 本溝出土遺物の器種や時期等については、岡山市文化政策課の乗岡実氏からご教示いただいた。
- (2) 野崎貴博「津島岡大遺跡における近世の条里について」『津島岡大遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.142-148 2003年

溝12・13(図7・59)

溝11の水門2から北側へ水を供給するための溝として、溝12・13を捉えることができる。両者とも3層上面から掘り込まれている。溝12は、上面が標高3.0m、底面は標高2.64m、深さ36cm、幅78cmとなる。断面はU字形である。埋土は暗灰色砂質土である。一方、溝13は上面が標高2.98m、底面が標高2.32m、深さ66cm、幅95cmを測る。底面が溝12よりも約30cm深い。断面形は上端付近で段をなし、底面がU字形をなす。埋土は溝12と同様に暗灰色砂質土である。これらの溝は、埋土が一層からなり、それぞれ一時期に埋まったものと考えられる。遺物は出土していない。

溝14(図67)

共同溝調査区の西辺において検出された南北溝で、溝11に接続するものと考えられる。本来は北側にさらに伸びるものと推定されるが、北側の土層の掘削後に溝の存在が判明した



1. 明灰褐色砂質土(微~細砂ファミナ状)
2. 明灰白色砂質土(粗砂)

図67 溝14(縮尺1/30)

ため、BC-4ライン付近より北の状況については不明である。検出したのは溝の東側の肩から底面にかけての部分である。3層上面から掘削がなされている。上面の標高2.9m、底面の標高2.72m、深さ28cm、現存幅65cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土として自然堆積と考えられる砂層が堆積している。遺物は出土していない。

溝15 (図68)

本体調査区の南壁土手において検出した南北溝である。3層上面において検出した。上面の標高2.92m、底面の標高2.79m、深さ13cm、幅60cmを測る。断面形はU字形となる。埋土は暗灰色粘質土となる。溝の底面から、幕末と考えられる染付け椀小片が出土している。

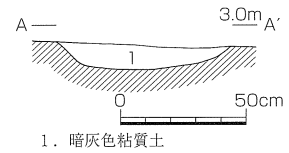


図68 溝15 (縮尺 1/30)

b 土坑

本体調査区において、近世～近代に至る31基の土坑を検出した(図59)。第27次地点においては同時期の土坑が北西部分に3基しか確認されていないことと比較すると、本調査地点における土坑数は非常に多いものと評価できる。また、共同溝調査区で土坑が認められなかったことと、本体調査区でも北辺には土坑が少ないことは、第27次調査地点における土坑が希薄な状況と合致したものと見える。土坑の全体的な分布をみると、溝15が北側にのびるものと想定される南北ライン(15-20ライン)の東西脇に、まとまりを形成しながら列をなす。この南北列がもっとも明確な規則的な分布を示すものといえる。また、東西方向にも短いながら列が形成される。溝11南側沿いの列(土坑20-26)と、南端近くの土坑36・37の並びがそれである。そのようにみると、中央付近において切り合いながら作られる土坑32-34の東に作られた土坑31も、東西の列のひとつとみなせる可能性がある。調査区北辺の土坑28・29と西辺の土坑50のように、南北と東西の列状のまとまりからはずれた位置にも少数ながら土坑が築かれている。ただし、土坑29については先述したように溝11の範囲に寄りすぎているため、一連の土坑ではない可能性もある。こうした土坑の分布は、耕作地の区画と密接に関連するものと推定される。南北列の東側のまとまりと、3ないし2つの東西列との交点は、耕作地の北西・北東隅にあたるものと考えられる。

土坑の形状は、平面形から3つに大別することができる。A類は円形プランを呈するものである。このタイプの土坑には、円形曲物が枠として利用されているものがある。B類はA類に類するが、楕円形プランとなるものである。C類は、A・B類とは形態的に異なり、隅丸長方形を呈するものである。以下では、類型ごとに状況をみていきたい。なお、個々の規模や標高等のデータについては、表2を参照されたい。

土坑A類(図69) A類に属する土坑は、22-24・27-29・31・39・40-42・48・50の計14基からなる。規模は、現状の上面で径120cm前後に集中する。このうち、円形曲物を有するのは土坑25・28・42である(図69-a・b・f)。曲物はいずれも径100cm前後となる。これらの土坑の断面形及び埋土をみると、曲物の形状を示すほぼ垂直なラインをみることができる。土坑25・28では、曲物を設置する際の掘り方の埋土がみられる。同様の断面形と土層の堆積が認められるのが土坑24・40(b・g)であり、少なくともこれらは曲物が使用されたものと捉えることができる。他の土坑A類についても、断面形と円形を呈する平面形から、曲物の使用の可能性はある。土坑25・40では、底面に板材がみられ、曲物の形状を保つための底板と考えられる。

埋土の状況をみてみよう。本類型に特徴的なのが、土坑24・25のように造成土によって埋められた土坑がみられることである(a・b)。造成直前まで使用されていたものと考えられる。他の類型には同様の状況が認められない。土坑40では再掘削がなされた状況がみられる。古段階(4-8層)と新段階(1-3層)に分けることができる。古段階底面の板材や新段階の断面ラインから、両段階には円形曲物が使用されたことがわかる。

A類の分布をみると、他の類型と同様に全体に分散する状況がみられる。一方、遺構の切り合い関係からみる

調査の成果

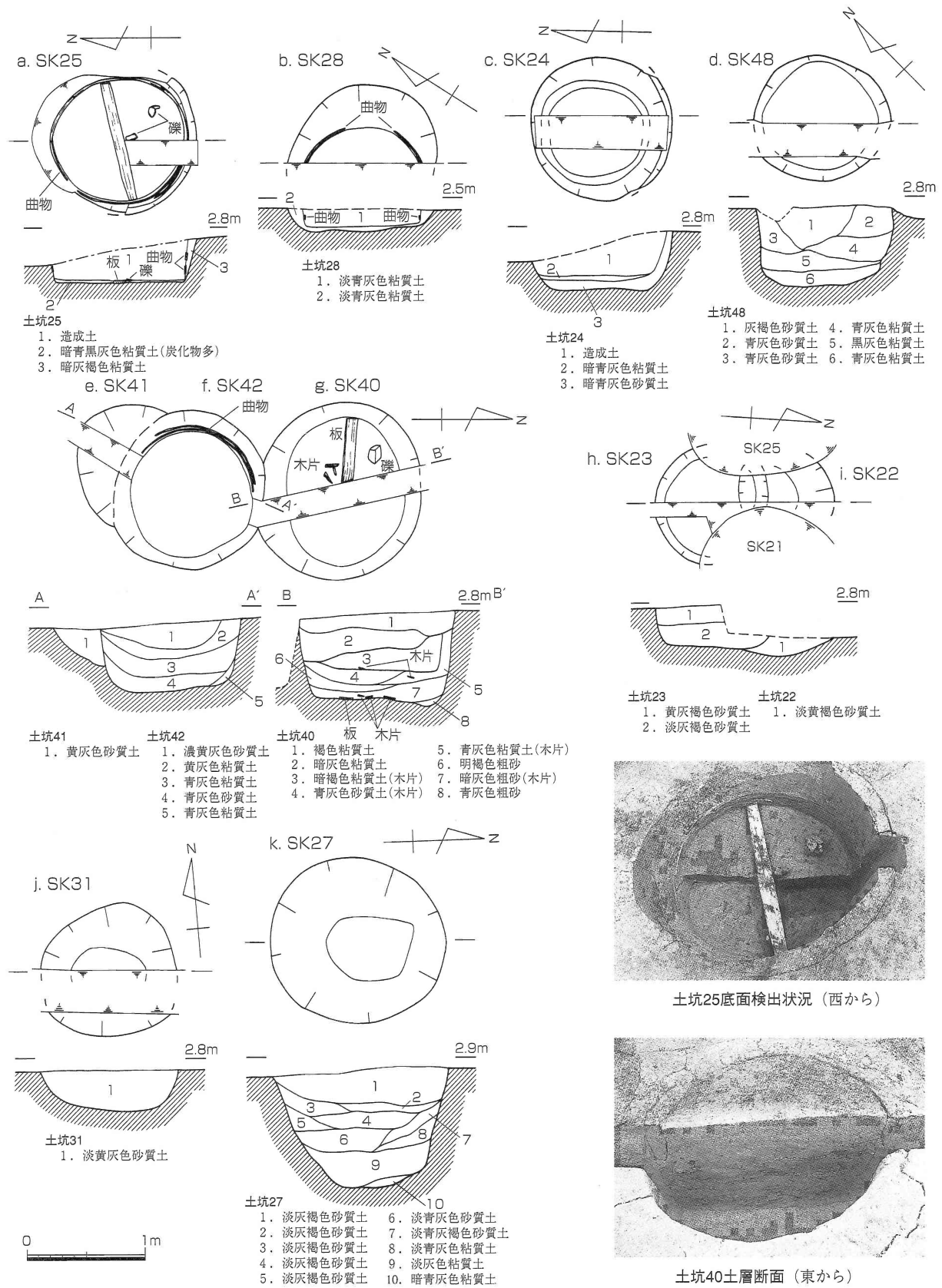


図69 近世土坑A類(縮尺1/50)

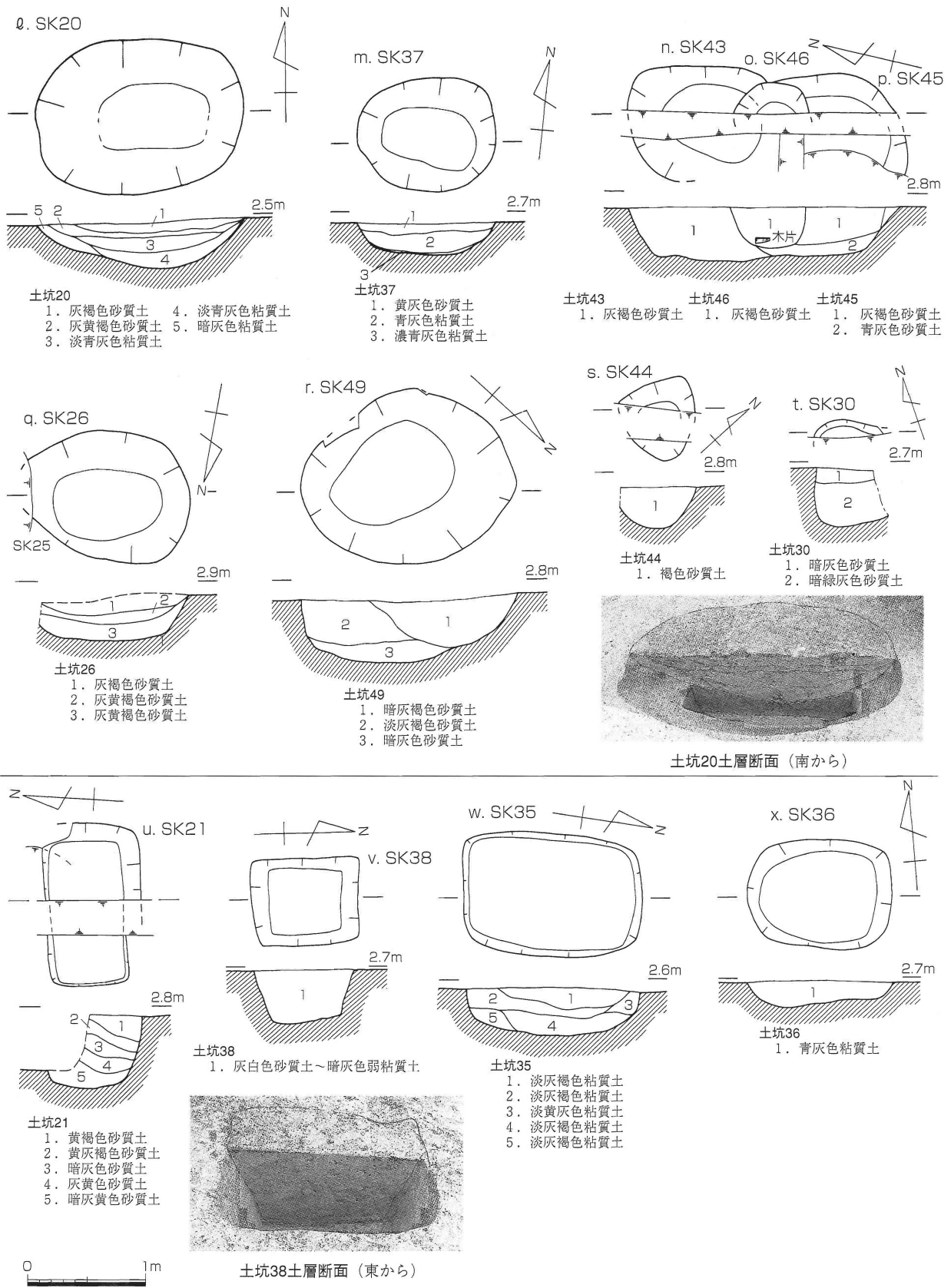


図70 近世土坑B・C類 (縮尺 1/50)

調査の成果

と、B・C類よりも新しく作られる場合を認めることができる。土坑22～24はB類の26やC類の21の構築後に作られている。同様にA類の土坑48は、B類の46を切っている。現状では、逆の切り合い関係は認められない。このようにみると、土坑A類は相対的に新しい段階に築かれたものである可能性が高いものといえる。

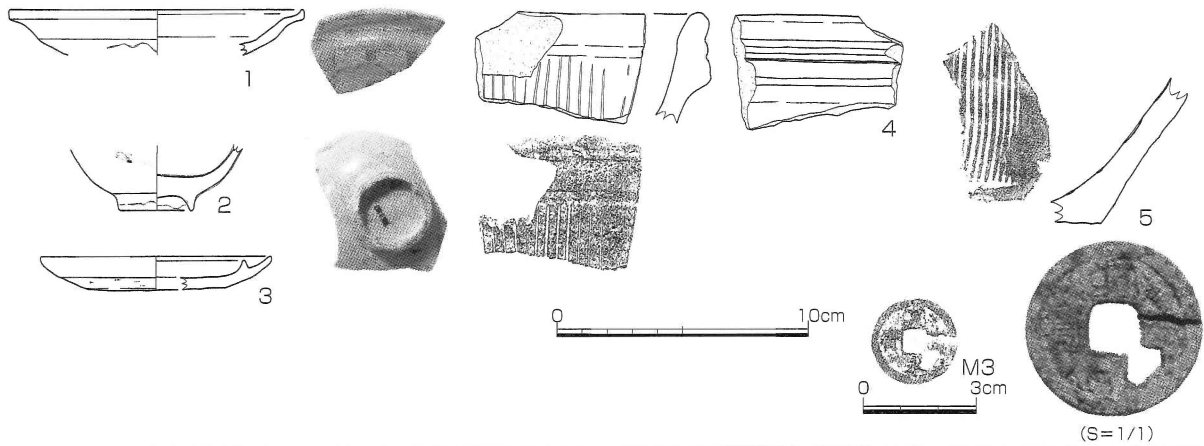
土坑B類（図70上段） B類の土坑は、20・26・32～34・37・43～47・49の計13基からなる。上面の規模は60～170cmとなり、他の類型に比べて幅広いバリエーションがみられる。平面形は楕円形を基本とする。断面形は擂鉢状ないし逆台形状を呈する。この類型も、何らかの枠木が使用されていた可能性もあるが判然としない。

分布をみると、他の類型と同様に、全体としては分散した状況を示す。ただし、土坑43～47・49は比較的まとまって分布しており、かつその東向かいにA類が分布していることから、何らかの意味のあるまとまりである可能性もある。土坑の切り合い関係については、先に述べたようにA類よりも古い場合が認められる。

土坑C類（図70下段） C類の土坑は21・35・36・38の4基である。特徴的な隅丸長方形となる平面形となる。規模は90～150cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦となる。これらの土坑は、長方形の曲物や箱が内部に設置されていた可能性が想定される。C類の分布も分散した状況を示す。

出土遺物（図71） いくつかの土坑内からは少量の陶磁器小片が出土している⁴¹。時期は幕末を主体としながら、17世紀前後の遺物が混ざる状況となる。時期をみると、土坑33から出土した1の唐津焼折縁皿と5の備前焼擂鉢は、1が17世紀前半、5が16世紀末～17世紀初頭のものである。土坑40から出土した2の染付けと4の備前焼擂鉢は、18世紀後半～19世紀初頭のものと考えられる。土坑48から出土した3の備前焼灯明皿は、19世紀～明治期のものである。M3は、土坑40から出土した寛永通宝である。土坑33がB類であるのに対し、土坑40・48はA類であり、先の遺構の切り合い関係から想定した大局的な先後関係とも矛盾しない。

以上のように、近世土坑の類型と分布、出土遺物について検討してきた。類型差の意味については、内部に設置した枠の形状の差とともに、切り合い関係からB・C類→A類という大局的な時期差の存在を考えた。溝11においては、土層関係と出土遺物を総合して幕末段階と明治期段階に大きく区分して捉えたが、土坑にみられる先



番号	器種	出土遺構	法量 (cm)	形態・手法他	色調	胎土
1	唐津 折縁皿	土坑33	口径: (11.8)	内: 回転ナデ・施釉 外: 回転ナデ・ヘラ削り・一部施釉	釉: 緑灰色 釉がない部分: 赤褐色	微砂・均質
2	染付 碗	土坑40	底径: 3.0	内・外: 施釉、高台底面: 露胎	淡緑灰白色	微砂・均質
3	備前焼 灯明皿	土坑48	口径: (9.3) 高: (1.3)	内: 回転ナデ、外: 回転ナデ・回転ヘラ削り	暗赤褐色	微砂・均質
4	備前焼 擂鉢	土坑40	-	ヨコナデ、内面に卸目	赤褐色、暗褐色・赤褐色	細砂
5	備前焼 擂鉢	土坑33	-	内: 卸目・使用による摩滅著しい 外: ヨコナデ、底: 粗いナデ	暗青灰色、暗赤褐色	細砂

番号	器種	出土遺構	径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	特徴	材質
M3	銭	土坑40	23.0	1.0	(1.7)	寛永通宝	銅

図71 近世土坑出土遺物（縮尺1～5：1/3、M3：1/2）

後関係も溝11の新古に対応する可能性があるだろう。

註

(1) 溝11と同様に、近世土坑出土遺物についても、岡山市文化政策課の乗岡実氏からご教示いただいた。

第7節 包含層出土の石器・金属器

ここでは、古墳時代後期～中世までの包含層から出土した、本来の土層から遊離したものを含む石器・金属器について概説したい。中世段階ないし古墳時代後期の段階には、当該期の包含層中に縄文時代～弥生時代の石器が含まれている（S11～23・26・27）。耕作用の土地の改変がなされた結果、古い段階の遺物が包含層中に混じり込んだものと考えられる。包含層からは35点の石器（製品15点、剥片20点）が出土している。また、中世の南北溝からも8点の石器（製品2点、剥片6点）が出土しており、下層の巻き上げによる混入と考えられる。剥片については、いずれもサヌカイトの小片であり、縄文時代～弥生時代の遺物であると考えられる。

S11～19は、サヌカイト製の石鏃で、S20・21はその未成品である。製品については、いずれもいくぶん欠損した状態である。凹基無茎鏃が主体をなす。

S22はサヌカイト製の石錐である。先端付近の破片である。片面調整であり、断面形は蒲鋒形を呈する。

S23はサヌカイト製のスクレイパーである。両側縁と下縁に刃部が作り出されている。

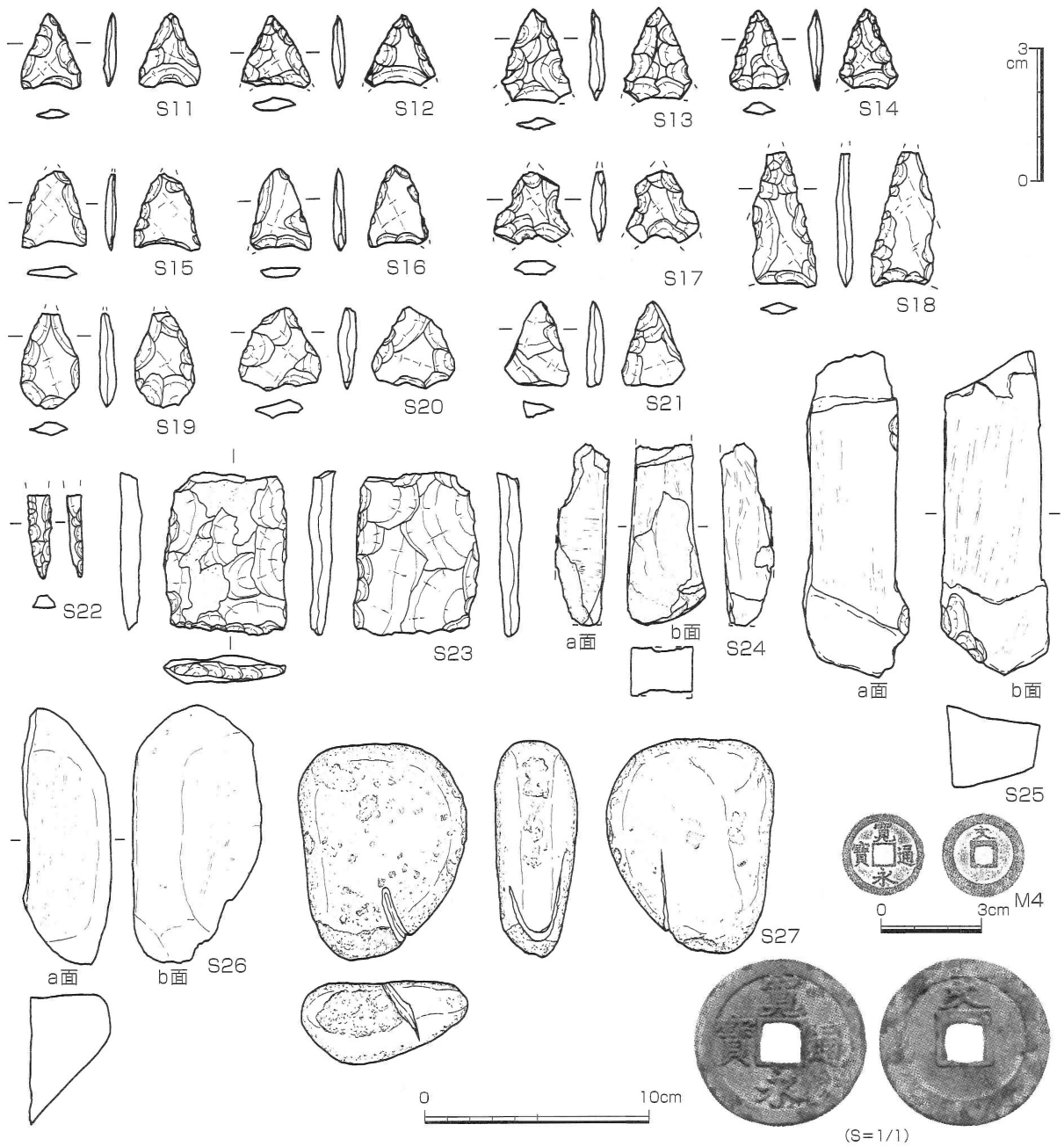
S24・25は砥石である。S24は粘板岩製で、上部とb面及びb面の裏面が欠損している。片側長辺（c面）が湾曲する形状となる。擦痕は全面に認められる。b面では、中央の長軸方向に1mmほどの段が研磨によって形成されている。S25は砂岩製である。やや軟質であり、板状の剥離がみられる。a面とb面に長軸方向の擦痕が認められる。これらについては形態と材質から、他の石器とは異なり本来の包含層の時期である中世に属するものと考えてよいだろう。

S26は、大きく欠損しているが、平坦な部分に擦痕による光沢が認められるため、石皿と考えられる。a面の方が、b面よりも擦痕が明瞭である。

S27は閃緑岩製の敲石である。下端面と片側の側面に敲打痕が認められる。下端部分には、幅3～6mm、深さ2～3mm、断面三角状の細い溝が掘られている。紐などをかけるための溝であると考えられる。

M4は、排土中からの出土であるが、遺存状況の良好な寛永通宝である。裏面に「文」が鋳出された文銭（初鑄年1668年）である。他に金属器関連では、中世層から2～4cm大の鉄滓2点が出土している。また、鉄片が中世層から12点、近世層から1点出土した。

調査の成果



番号	器種	層位	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	特徴
S11	石鏃	8	16.2	13.3	2.5	0.4	サヌカイト	凹基無著鏃
S12	石鏃	8	(15.5)	(15.2)	3.1	0.6	サヌカイト	凹基無著鏃、基部欠損
S13	石鏃	中世溝	(20.6)	(15.6)	3.3	0.8	サヌカイト	凹基無著鏃、基部欠損
S14	石鏃	8	17.6	(12.4)	2.9	0.5	サヌカイト	平基無著鏃、基部欠損
S15	石鏃	中世溝	(17.4)	14.0	2.8	0.6	サヌカイト	凹基無著鏃、先端部欠損
S16	石鏃	8	18.6	(13.2)	2.5	0.6	サヌカイト	凹基無著鏃、基部欠損
S17	石鏃	8	(16.1)	(15.7)	3.1	0.8	サヌカイト	凹基無著鏃、先端部・基部欠損
S18	石鏃	8	(30.2)	14.5	3.3	1.6	サヌカイト	凹基無著鏃、先端部・基部欠損
S19	石鏃	8	(2.13)	13.1	3.2	1.0	サヌカイト	凹基無著鏃、先端部欠損
S20	石鏃未成品	9	18.4	18.0	4.1	1.3	サヌカイト	
S21	石鏃未成品	8	19.2	14.1	3.6	1.0	サヌカイト	
S22	石鏃	8	(18.5)	(5.2)	(2.7)	0.4	サヌカイト	上部欠損
S23	スクレイパー	8	38.1	27.5	4.6	7.2	サヌカイト	背面に自然面残る、側縁面調整、下辺片面調整
S24	砥石	6・7	81.9	35.6	22.1	80.7	粘板岩	a面は光沢が蛇腹状につく。b面とその裏面は大半が欠損
S25	砥石	8	147.1	49.0	42.2	419.2	砂岩	全体的に風化。b面に擦痕明確。a・b面以外は擦痕不明。b面裏面は自然面か。
S26	石皿	8	(116.5)	(57.6)	(56.9)	305.6	粘板岩	a面に縦方向の擦痕多い。b面にも擦痕斜め方向に少しあり。
S27	敲石	8	97.4	75.2	36.9	350.9	閃緑岩	平坦面に敲打痕あり

番号	器種	出土層位	径(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	特徴	材質
M4	銭	排土中	25.4	1.5	4.2	寛永通宝(1668年)、裏面「文」	銅

図72 包含層出土遺物 (縮尺 S11~S23: 2/3、S24~S27: 1/3、M4: 1/2)

第4章 考察

古墳時代後期から中世における遺構群の変遷

1. 問題の所在

今回の調査地点である津島岡大遺跡第26次調査では、中世層に削平された柵列や溝状遺構等が検出された(図47)。すなわち、本体調査区において東半部に柵列6条、西半部に溝状遺構3条(溝6~8)と、底面に凹凸を有する柵列状遺構、共同溝調査区北端付近において東西溝1条(溝10)を確認した。それらの時期は、出土遺物と第27次調査地点との対応関係から、南北の溝状遺構と東西溝については中世であることが明確である。一方、柵列と柵列状遺構については、その時期が明確でない。柵列については、ピット内からいわゆるTK209型式ごろの須恵器片が出土しているが、小片のため混入の可能性も存在した。柵列状遺構に関しては、溝状遺構を完掘した後に確認され、溝状遺構とも主軸がズレることから、溝状遺構よりも相対的に古いものと考えられるが、その時期は明確でない。したがって、柵列と柵列状遺構の時期的位置づけいかんによって、本調査地点の歴史の変遷もまた大きく変わるものといえる。

さて、岡山県下におけるこれまでの発掘調査の中で、同様の遺構が検出される場合がみられる⁽¹⁾。とくに柵列状遺構や溝状遺構については、道路関連遺構の可能性が指摘されてきた⁽²⁾。本調査地点の当該期の遺構群も、そうした道路関連遺構のひとつと推定される。

以下では、岡山県内を中心に具体的に遺構の類例について示しながら、それらと比較検討することによって本調査地点における遺構群の時期の問題や性格について検討したい。なお、遺構の名称については、さまざまな呼称がなされているが、ここでは近年の岡山県下の調査における呼称法を活かしながら、便宜的に次のように呼称したい。すなわち、1・2基を一単位とするピットの列を「柵列」、いわゆる波板状凹凸面に相当すると考えられる不定形な長楕円ないし隅丸長方形を一単位とし、その長軸を横位として列をなすものを「柵列状遺構」、溝に類するが幅広で深さが浅く、底面が不整形なものを「溝状遺構」とする。これらの用語をもとに、統一的に各遺跡の状況をみていきたい。

2. 類例の検討(図73・74)

(1) 津島岡大遺跡における類似遺構

まず、これまでの津島岡大遺跡の調査において検出された、柵列または柵列状遺構と類似する遺構に関してみてみよう。本遺跡においては、第27次調査(創立五十周年記念館新営)と第6次調査(工学部生物応用工学科棟新営)、第17次調査(環境理工学部I期工事)という3つの地点において柵列状遺構を認めることができる。以下、各地点の状況を簡潔にみてみたい。

第27次調査〈創立五十周年記念館新営〉⁽³⁾(1) 南北方向にのびる中世の溝状遺構の底面において、柵列状遺構が検出されている。まず溝状遺構については、第26次調査地点にも連続するもので、通常の溝とは異なる平面形・断面形となる。柵列状遺構は、長さ1.0~2.0mを測る隅丸長方形ないし長楕円形の浅い窪みに、径0.4~0.8mの楕円形の窪みが2基ほど作られている。こうした形状のものが、南北に18列ほどつくられている。これらは溝状遺構と軸の方向が一致することから、溝状遺構に付随するものと考えられている。したがって、この柵列状遺構は中世にまで下るものといえる。旧地形としては、遺構の下に縄文時代から弥生時代における谷2がひろがる状況となる。

考 察

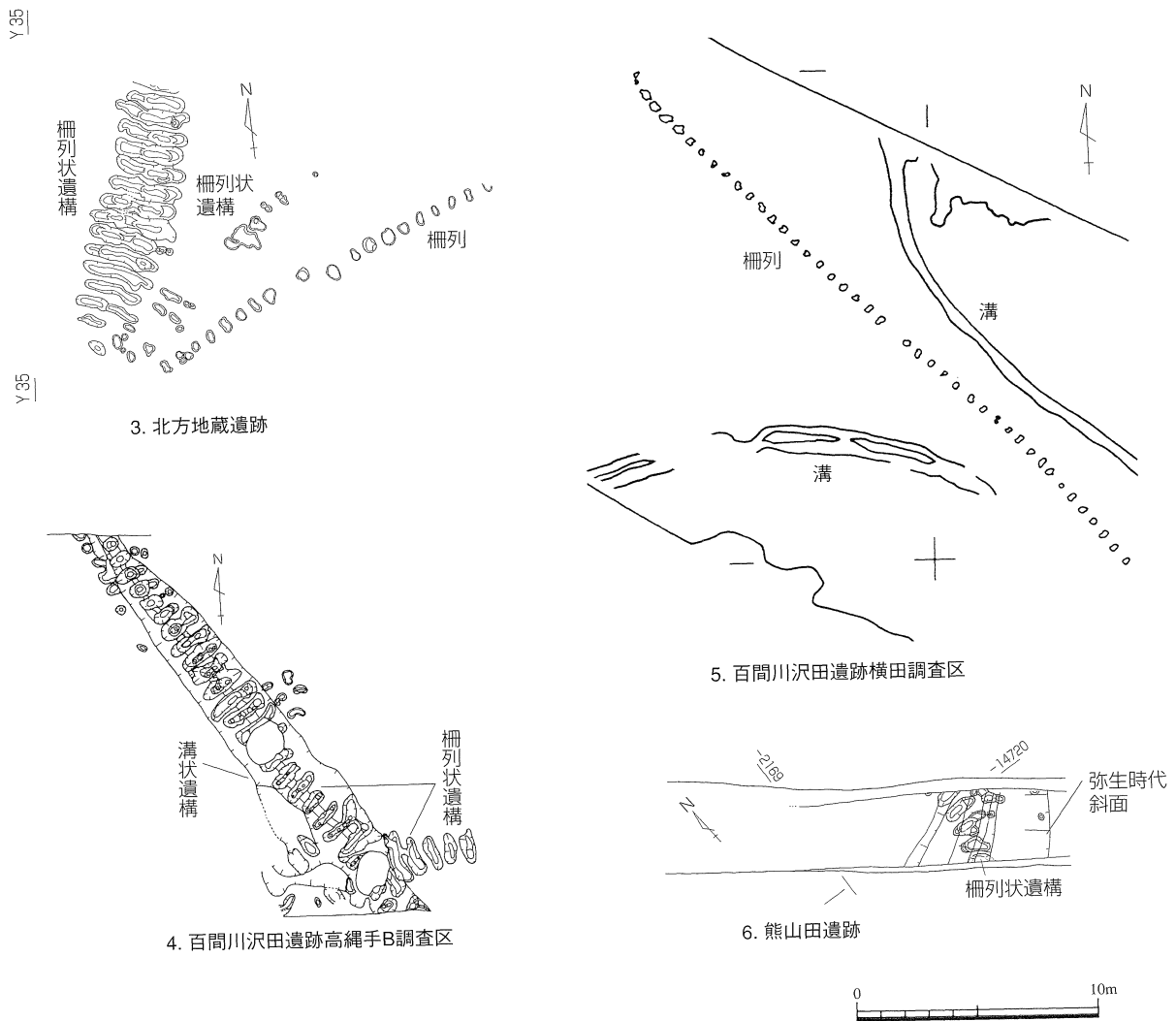
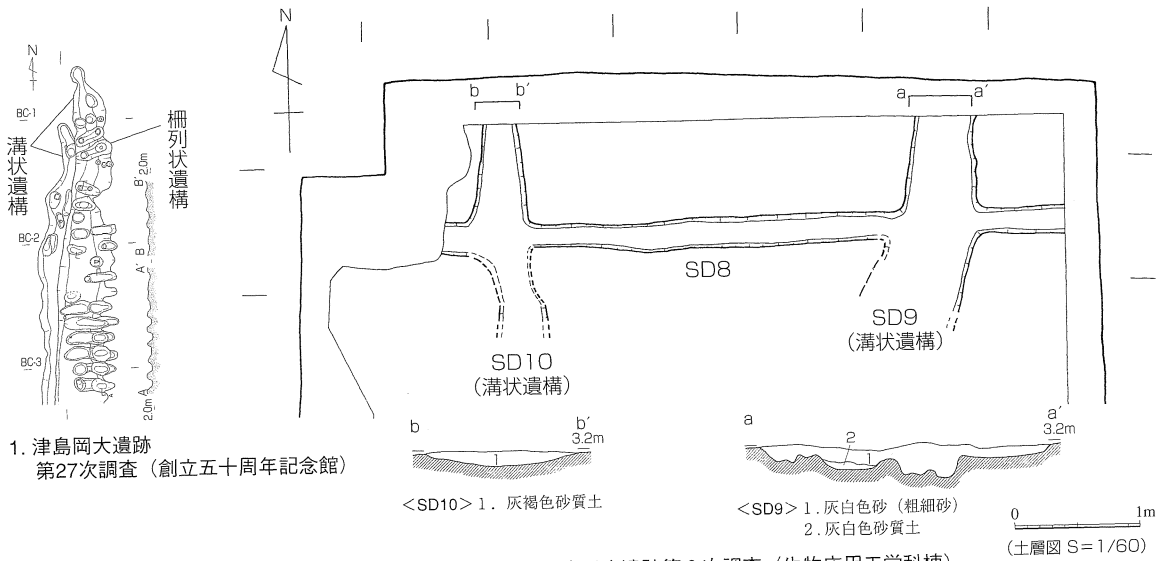


図73 柵列・柵列状遺構・溝状遺構の検出例1 (縮尺 1/300)

第6次調査〈工学部生物応用工学科棟新堂〉⁽⁴⁾(2) 報告段階では認識はなされていなかったが、遺構の断面形や写真から判断すると、南北方向の溝状遺構と柵列状遺構を確認することができる。時期については、遺構内の出土遺物から6世紀後半～7世紀前半の時期が当てられている。SD8は、第7次調査や第9次調査⁽⁵⁾においても検出されており、ほぼ東西方向に直線状にのびる溝であることが判明している。溝状遺構と考えられるのは、浅い掘り方となるSD9・10である。SD9の底面には、柵列状遺構が北端部分を中心に認められる。a断面にみられる凹凸は、柵列状遺構によるものと考えられる。SD10に柵列状遺構が存在していたかどうかについては判然としない。旧地形としては、SD10付近以外の調査区全体が、縄文時代～弥生時代の河道・湿地をなしていた。

第17次調査〈環境理工学部Ⅰ期工事〉⁽⁶⁾ 南北方向の2列の柵列状遺構が検出されている。長軸が1mほどの柵列状遺構を一単位としている。東側の列は、長さ約15mの範囲にのびる。西側列は約3mが検出されている。これらの遺構の時期については、層序から6～7世紀代の時期が想定されている。

(2) 岡山県下の他の遺跡における状況

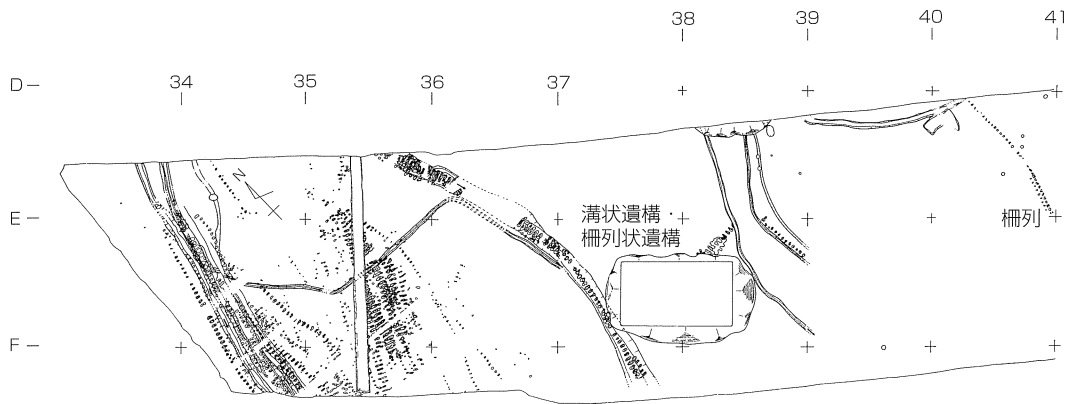
次に、岡山県内において検出された柵列・柵列状遺構・溝状遺構の具体相について、遺跡ごとに概観したい。
 北方地蔵遺跡⁽⁷⁾(3) 岡山市大和町に所在する。津島岡大遺跡に近接し、本調査地点からは約1kmの距離にある。この北方地蔵遺跡から、柵列と柵列状遺構が検出されている。なお、遺構の南側の状況については、削平によって不明となっている。遺構の時期については出土遺物がないことから層位をもとに判断されており、古墳時代～古代の時期が推定されている。柵列は、北東-南西方向に長さ50cmほどのピットが直線をなしてみられる。一連の列として報告されているが、列の軸が2つ認められるため、2列に細分することも可能だろう。一方、柵列状遺構としては2列が検出されている。これらは柵列と斜交する位置につくられている。

百間川沢田遺跡高縄手B調査区⁽⁸⁾(4) 岡山市沢田に所在する。柵列状遺構と溝状遺構が検出されている。柵列状遺構には溝状遺構に沿って作られるものと、溝状遺構に直交するものの2種類がある。溝状遺構は北西-南東にかけて、長さ約20mにわたってのびる。遺構内からは、古墳時代後期～古代の須恵器が出土している。このことから遺構の上限は古代にまで下るものと推定されている。

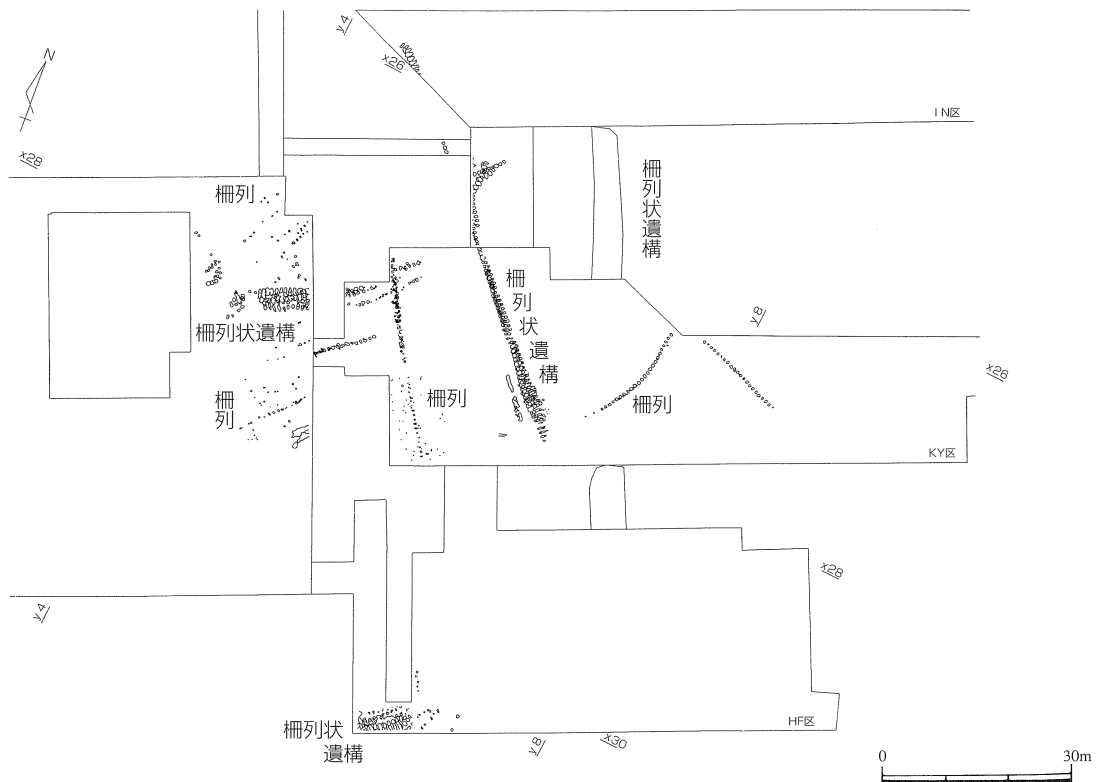
百間川沢田遺跡横田調査区⁽⁹⁾(5) 埋土内に古墳時代後期の土器片を含む一条の柵列が検出されている。柵列はほぼ直線をなして、北西-南東方向に28.5mにわたってのびている。ピットは2基が一对となって単位をなす。報告では、2本の柱で、横木を挟むような構造の柵が想定されている。

百間川原尾島遺跡三ノ坪調査区⁽¹⁰⁾(7) 岡山市原尾島に所在する。三ノ坪調査区において多数の溝状遺構と柵列状遺構、柵列が密集して検出されている。時期については、層序と遺構内の遺物から古墳時代中頃～後半期と考えられているが、個別遺構に関する記述や図示された出土須恵器をみると7世紀を中心とするものとみてよいだろう。32列以上の柵列状遺構および柵列と、溝状遺構10条以上が確認されている。報告の時点では溝状遺構については水路の機能が想定されているが、後の類例の増加によって、道路関連遺構としての可能性も提起されている⁽¹¹⁾。

雄町遺跡⁽¹²⁾ 岡山市雄町に所在する。柵列状遺構と柵列、溝状遺構が検出されている⁽¹³⁾。柵列状遺構は約40mにわたってのびる。直線部分と弧状をなす部分とがある。遺構埋土中から7世紀代の須恵器片が出土したことが報告されている。一方、柵列は長さ百数十mにわたって東西方向に直線的にのびる。北側列と南側列があり、両者の距離はピットの芯心間で1.2mを測る。北側列については、溝の中に2基一对となるピットが等間隔で作られているようである。南側列については、溝は認められず、50×30cm前後の楕円形ピットが2基一对となって連続する。ピットの底面は水平にちかい。これらの柵列内から出土した須恵器片は、時期については8世紀代を上限とするものと考えられている。溝状遺構は、柵列とはほぼ並行して東西方向にのびる。2列の溝状遺構が検出されており、道路としての機能の可能性が示されている。



7. 百間川原尾島遺跡三ノ坪調査区



8. 南溝手遺跡

図74 柵列・柵列状遺構・溝状遺構の検出例2 (縮尺1/1200)

このように、雄町遺跡では、7世紀段階（柵列状遺構）と8世紀段階（柵列・溝状遺構）の二段階におおむね分かれるようである。両者の遺構が共存する段階も存在した可能性もあるが、ここでは前者を前半段階、後者を後半段階と捉えておく。

熊山田遺跡⁽¹⁴⁾(6) 邑久郡邑久町山田庄に所在する。南北方向にのびる柵列状遺構が1条検出されている。細長いトレンチ内において、列の幅1.6m前後、長さ約3.8m分が確認されている。時期については、遺構中から出土した須恵器から、古墳時代後期以降の時期が当てられている。柵列状遺構が作られた生活面の下には、弥生時代前期～中期頃の斜面がひろがっている。このかつての斜面の肩から2.2mほど窪地側に入る位置に、柵列状遺

構が形成されている。

南溝手遺跡⁽¹⁵⁾(8) 総社市南溝手に所在する。古墳時代後期を中心とし、一部古代に下る可能性がある多数の柵列状遺構と柵列が検出されている。遺構は北西—南東または北東—南西方向にのびる。もっとも長い柵列状遺構は、全体で68mを測る。これらの遺構は、縄文時代から弥生時代の河道から微高地にかけての範囲に集中する傾向が報告されている。

3. 調査地点における古墳時代後期から中世における遺構の変遷

(1) 比較検討

これまで津島岡大遺跡と岡山県内の遺跡における、柵列・柵列状遺構・溝状遺構の様相についてみてきた。ここでは、それらの遺構と、第26・27次調査地点で確認された遺構群との比較を行いながら、時期や性格の問題について検討したい。

まず時期については、これまでも述べられていたように古墳時代後期～古代に集中することがわかる。このことは、第26次調査の柵列に伴う須恵器小片が、遺構の時期を示す可能性を示唆する。ただし、類例においても遺構内から出土した土器が小片であるため、凶化に適さない場合も多く、時期の詳細については今後の検討が必要である⁽¹⁶⁾。

一遺跡内における遺構の組み合わせをみると、遺跡ごとにバリエーションがみられる。遺構の組み合わせには調査面積や遺存状況に規定される面もあるが、そうした中で、本調査地点の遺構のあり方を考える上で示唆的な遺構の組み合わせ例が存在する。溝状遺構に柵列状遺構が伴う例をみてみよう。百間川沢田遺跡高縄手B調査区や百間川原尾島遺跡では、柵列状遺構が溝状遺構と並行する状況が認められる。この状況は、第27次調査地点で検出された溝状遺構と柵列状遺構の位置関係と同様である。この組み合わせについては、道路状遺構として近年論じられているものである⁽¹⁷⁾。時期については、百間川沢田遺跡高縄手B調査区が古代、百間川原尾島遺跡が7世紀を中心とする遺構であるのに対し、津島岡大遺跡第27次調査のそれは中世段階のものである。渡部徹也の古道に関する研究を参照すると、中世においても同様の遺構が認められるため⁽¹⁸⁾、溝状遺構と柵列状遺構の組み合わせについては中世段階まで継続するものと考えられる。

一方、第26次調査の溝状遺構の下で確認された柵列状遺構については、先述したように溝状遺構と斜交するため、上記の組み合わせとは異なる様相を示すものといえる。したがって、類例から判断すると本調査地点における柵列状遺構は、溝状遺構よりも古い段階のものと考えられよう。

このように第26次調査において中世以前に柵列状遺構が存在していたとすると、問題となるのが調査区東半部の柵列との関係である。柵列状遺構の検出例をみると、溝状遺構との組み合わせの他に、柵列状遺構のみで成り立つ場合（雄町前半、津島岡大第17次）と、柵列とセットになる場合（北方地蔵、南溝手）があることがわかる。したがって、柵列と柵列状遺構の組み合わせが成立する可能性は十分ある。

では、本調査地点の柵列は類例と比較してどのように位置づけられるだろうか。柵列を構成するピットに注目すると、岡山県下においてはピットの単位によって、a類：2基のピットが一組の単位となるものと、b類：1基のピットからなるものという、二つのあり方を認めることができる。北方地蔵遺跡がb類であるのに対し、百間川沢田遺跡横田調査区や雄町遺跡後半ではa類となり、百間川原尾島遺跡や南溝手遺跡ではa類が主体となっている。a類については、先述したように、2基のピットの間に横木を挟む柵の構造の想定もなされている。翻って本調査地点の柵列はb類であり、ピットの形状という観点からみると北方地蔵例がもっとも類似するものといえよう。

柵列の列構造についてみると、本調査地点では直線をなすものと、L字状をなすものが認められた。岡山県下の例については、基本的には直線状をなすものといえる。その一方で、南溝手遺跡の検出状況を検討すると、報

告では指摘はみられないものの、柵列が直交するように分布している部分が認められる。複数の柵列の同時性については判然としないものの、南溝手の列構造は本調査地点のそれと比較的類似する例として挙げることができるだろう。

このように本調査地点の柵列は、ピットの形状や列構造において、北方地蔵遺跡や南溝手遺跡の柵列とより類似するものであるといえる。時期については北方地蔵が古墳時代～古代、南溝手が古墳時代後期から一部古代までの範ちゅうを示す。したがって、本調査地点の柵列の時期については、類例の時期を考慮し、かつピット内の出土須恵器を勘案するならば、6世紀末～7世紀初頭ごろを想定することにも一定の妥当性があるだろう。

北方地蔵と南溝手の2つの遺跡において、柵列と柵列状遺構がセットとなって検出されていることは、本調査地点における柵列と柵列状遺構の関連性を考える上で参考となる。柵列と柵列状遺構との位置関係をみると、北方地蔵遺跡や南溝手遺跡では、両者が斜交するように分布している状況がみられる。本調査地点においても、柵列と柵列状遺構がのびる方向は斜めとなるため、これらの遺跡と同様の状況を示すものといえよう。そのように考えるならば、本調査地点における柵列と柵列状遺構がセットとなる状況を想定することも可能であると考えられる。その一方で、雄町遺跡前半や津島岡大遺跡第17次調査のように、柵列状遺構のみで成り立っていた可能性ももちろん否定できない。ここでは類例から考えると、現状では2つの可能性がともに成り立ちうることを示すにとどめておきたい。

(2) 第26・27次調査地点における遺構の形成過程

以上の比較検討から、第26・27次調査地点における柵列・柵列状遺構・溝状遺構の変遷については、次のように整理することができる。すなわち、まず第26次調査地点において6世紀末・7世紀初頭ごろに柵列がつくられ、それと同時期か相前後する時期に北西－南東方向に柵列状遺構が形成される。その後の中世の段階にいたって調査区東部に南北方向の溝状遺構がつくられる。この溝状遺構は、第27次調査地点においては柵列状遺構を伴うものである。第3章の事実報告では、柵列の時期に関しては、その方向から中世の溝状遺構に伴う可能性も挙げたが、上記の検討から上述した時期にさかのぼる可能性の方が現状では高いものと判断される。

こうした遺構の変遷には、旧地形の影響も反映されている。すなわち、旧地形として縄文時代中期～弥生時代の段階には、北東から南西方向に、幅約7mの谷1と幅約11mの谷2がひろがっていた。これらの谷は、弥生時代後期初頭にはほぼ埋没することになる。6世紀末・7世紀初頭ごろになると、東側微高地上に柵列が築かれる。また、これと近い時期に、埋没した谷2に直交するように柵列状遺構がつくられた。中世段階になると、まず柵列状遺構を伴う南北方向の溝状遺構が、谷2の範囲をまたぐように形成される。その後、この溝状遺構の南北ラインを踏襲する形で、大畦畔が築かれることになる。

このようにみると、谷が埋没した古墳時代～中世においても、かつての谷地形に規定されながら遺構が作られていたことがわかる。柵列状遺構や溝状遺構が、旧地形の影響で地盤が不安定な部分に築かれていることは、これらの遺構を「道」の造成のための舗装にかかわるものと捉える見解に有利となるものといえる。同様の状況は、南溝手遺跡や熊山田遺跡などでも認められるものである。また逆に、本調査地点において柵列が微高地を中心に作られていることは、柵列の機能が柵列状遺構や溝状遺構とは異なるものであることを示唆する。柵列の機能について、具体的に推定することは現状では困難であるが、土地の区画や通路にかかわる施設であったものと想定される。

その一方、第26・27次調査地点においては、遺構の形成時期の差によって旧地形との関係が異なっていることにも注意したい。すなわち、古相の柵列状遺構は谷に直交する方向で、地形に準拠する形でつくられるのに対し、中世段階の溝状遺構・柵列状遺構は、明らかに方位を意識して築かれている。この方位を基準とする土地区画は、その後には築かれる大畦畔や、近世の東西大溝にも継承されていく。それに対し、柵列については方位に依拠するものとみなせるかどうか判然としない。しかしながら、厳密に言えば南北方向を正確に示す中世段階の溝

状遺構に比べて列の軸が東に振っているため、この遺構を方位意識の反映とみなすことにはいくぶん無理があるだろう。また、これまで検討した6・7世紀を中心とする類例において、遺構の方位がまちまちであることも注意される。したがって、第26・27次調査地点における方位に則る土地区画の確実な例は、中世以降のものともみなせよう⁽¹⁹⁾。

さて、以上のように遺構の変遷をみてきたが、最後にこうした変遷の背景を考察してまとめたい。

まず、本調査地点における6世紀末・7世紀初頭頃の柵列と、それと同時ないしは前後する時期における柵列状遺構の出現の背景を考える上で、同様の遺構が岡山県下において当該期を中心に展開する現象に注目することができる。近畿地方を対象とした広瀬和雄⁽²⁰⁾や、北陸地方に関する宇野隆夫⁽²¹⁾による集落研究を参照すると、6世紀末・7世紀初頭の時期にひとつの大きな画期が見出されている。両地域に共通する画期としては、前代からの集落の消滅と新たな集落選地の開始を挙げることができる。また宇野は、小規模集落の再編・集約化を、推古朝の変革によって形成される国家的な集落の特質としている⁽²²⁾。岡山地域における柵列・柵列状遺構・溝状遺構の出現にも、そうした集落の大規模な再編が関連するものと推測する。集落の再編において、新たな土地区画や道の造成が必要となった結果、それらの遺構が当該期に多くひろがることになったのであろう。前方後円墳の消滅に代表される墓制の変革と軌を一にする、集落の再編・集約化の波が、これらの遺構の展開に表れているものと考えられる。

一方、中世の溝状遺構・柵列状遺構については、道路上遺構として認識してよいものといえる。渡部徹也の研究によると、中世の古道については、「生活道路」と「幹線道路」に分類がなされている⁽²³⁾。前者が簡易な舗装によるもので、日常的な生活道であるのに対し、後者は路面下の暗渠などによる大規模な土木工事が施されたものとされ、集落のメインストリートや集落間・内の幹線道路と考えられている。第26・27次調査地点において検出された溝状遺構・柵列状遺構は、後者の幹線道路に該当する遺構と考えられる。そのことを傍証するように、その後の大畦畔や近世・近代の土坑の配置に、溝状遺構を端緒とする南北ラインが踏襲されている。第26・27次調査地点から出土した中世の陶磁器が、津島岡大遺跡における他の調査地点に比べて豊富であること⁽²⁴⁾も、当時の往来を想起させるものといえる。

4. おわりに

以上、第26次調査地点と隣接する第27次調査地点において検出された、柵列と柵列状遺構、溝状遺構の変遷を理解するために、岡山地域における類例と比較しながら検討を行ってきた。遺構の詳細な構造比較や、全国的な視野に立った検討など課題もなお多いが、遺構の変遷に関する一定の見解が得られたものと思う。のこされた課題は、今後の構内遺跡に関する調査研究の中で取り組んでいきたい。

小稿をなすにあたり、本センターの山本悦世・岩崎志保・野崎貴博の各氏に貴重なご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

(光本 順)

註

- (1) 平井泰男「第4章まとめ 第1節発掘調査の概要」『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 岡山県文化財保護協会 1995年
岡山県下における類例については上記の文献を参考とした。
- (2) 例えば註1文献参照
- (3) 高田浩司編『津島岡大遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2003年
- (4) 土井基司・山本悦世編『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第9冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- (5) 小林青樹・野崎貴博編『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1998年

考 察

年

- (6) 岩崎志保編『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第21冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2005年
- (7) 岡田 博編『北方下沼遺跡・北方横田遺跡・北方中溝遺跡・北方地藏遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126 岡山県教育委員会 1998年
- (8) 二宮治夫編『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1985年
- (9) 平井 勝編『百間川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1993年
- (10) 正岡睦夫編『百間川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56 岡山県文化財保護協会 1984年
- (11) 注1文献参照
- (12) 高橋 護・正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972年
- (13) ここでは、報告で「柵列」と呼称されているものを「柵列状遺構」とし、「条里制遺構」と呼ばれるものを「柵列」としている。
- (14) 中野雅美編『熊山田遺跡』邑久町埋蔵文化財発掘調査報告1 岡山県邑久町教育委員会 2004年
- (15) 平井泰男編『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100 岡山県文化財保護協会 1995年
- (16) 逆に言えば、耕作土や整地土の場合、経験的に小片化した土器が出土するが、溝状遺構や柵列状遺構に土器小片が伴うことはそれらの遺構に整地関連の土層が敷かれたことを示唆するものといえる。耕作土の土器片出土状況については下記の文献を参考とした。

山本悦世「津島岡大遺跡における生業変遷—貯蔵穴と水田の実態—」『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第19冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.103-111 2004年
- (17) 例えば、渡部徹也「古道について—主に官道以外の事例から—」『古文化談叢』第33集 pp.155-190 1994年
- (18) 渡部徹也1994において、九州地域を中心とする弥生時代～中世に至る古道の集成と検討がなされている。その中で、熊本県うてな遺跡（熊本県教育委員会編『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告書第121集 熊本県教育委員会 1992年）における中世の溝状遺構・柵列状遺構の様相が、津島岡大遺跡第27次調査の遺構の状況と類似する。
- (19) 津島岡大遺跡における古墳時代後期の土地区画については、第6・7・9次調査の状況から、これまで正方位方格地割りの存在が提起されている（野崎貴博「岡山平野における正方位方格地割り水田の出現」『津島岡大遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第18冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター pp.125-132 1998年）。そうした見方から考えると、第26次調査地点における柵列についても、真北を基準としていた可能性はのこる。ただし例えば南溝手遺跡のように、一遺跡内において柵列と柵列状遺構の方向にバラエティが認められるものも存在するため、本調査地点の柵列を方位に依拠するものとみなすには躊躇を覚える。この問題については、今後の調査研究課題としたい。
- (20) 広瀬和雄「西日本の集落」『古墳時代の研究』第2巻 集落と豪族居館 雄山閣 pp.92-114 1990年
- (21) 宇野隆夫『律令社会の考古学的研究』桂書房 1991年
- (22) 註21文献
- (23) 註17文献
- (24) 岩崎志保氏・山本悦世氏のご教示による。

図出典（註に記した報告書による）

図73-1：高田編2003、2：土井・山本編1995、3：岡田編1998、4：二宮編1985、5：平井編1993、6：中野編2004

図74-7：正岡編1984、8：平井編1995

第5章 自然科学的分析

津島岡大遺跡第26次調査出土木材の樹種

能 城 修 一 (森林総合研究所木材特性研究領域)

津島岡大遺跡第26次調査で出土した近世の用水路と想定される溝から出土した杭28点の樹種を報告する。28点中には5分類群が認められた。ここでは、出土した樹種の木材解剖学的な記載を行い、代表的な試料の顕微鏡写真を示して同定の根拠を明らかにする。樹種同定用のプレパラート標本は、木材から横断面、接線断面、放射断面の切片をカミソリで切りとり、ガムクロラル（抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入して作製した。プレパラートには、OKUF-905からOKUF-932の番号をふして標本番号とした。プレパラート標本は森林総合研究所に保管されている。

1. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図1: 1 a - 1 c (OKUF-920)

垂直・水平樹脂道をもつ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量多く明瞭。樹脂道の分泌細胞はほとんど残っていない。放射組織は柔細胞と上下端に位置する放射仮道管からなり、分野壁孔は窓状、放射仮道管の水平壁は鋸歯状。保存状態が良好な試料では、鋸歯の突起は著しく、一部が重鋸歯となり、ときに上下の突起が接するほどであるため、アカマツと同定した。保存状態が悪く、鋸歯の状態が明瞭に観察できないものはマツ属複維管束亜属とした。

2. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1: 2 a - 2 c (OKUF-926)

垂直・水平のいずれの樹脂道も持たない針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材は量少ない。早材の終わりに樹脂細胞が散在し、樹脂細胞には黒色の樹脂が詰まっている。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のトウヒ型で孔口は垂直にちかく開き、1分野に普通2個。

3. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図2: 3 a - 3 c (OKUF-910)

径200-300 μ mほどの大型で丸い厚壁の単独管孔が年輪のはじめに緩く数列にならび、晩材では小型で薄壁の単独管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、道管内にはチロースが著しい。木部柔細胞はいびつな接線状。放射組織は単列同性。道管と放射柔細胞との壁孔は単壁孔状で柵状を呈する。

4. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図2: 4 a - 4 c (OKUF-931)

径100 μ mほどの中型で丸い厚壁の単独管孔が放射方向へ緩い火炎状に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔細胞はいびつな接線状。放射組織は同性で、小型で単列のものと、幅100 μ mを越え高さが1mm以上となる大型のものからなる。大型の放射組織にはときに結晶細胞が認められる。道管と放射柔細胞との壁孔は単壁孔状で柵状を呈する。

5. ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図3: 5 a - 5 c (OKUF-916)

径100-50 μ mほどの丸い厚壁の管孔が単独あるいは放射方向に2-3個複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔細胞は早材で周囲状、晩材で翼状へ連合翼状。放射組織は異性で3-4細胞幅、直立細胞にはときに結晶細胞が認められる。

検討した木材28点中20点がアカマツ、4点がマツ属複維管束亜属で、アカマツを主体とする二葉松類が90%近

くを占めていた(表1)。遺構ごとにみても、二葉松類を主体とするなかに、他の樹種が混じる形になっており、二葉松類を中心とした樹種の利用を示している。二葉松類の木材は強靱で耐水性が高く、土台・梁・柱・板をはじめとする建築材や杭・橋・樋といった土木材に使われる(平井, 1996)。二葉松類の水路での使用は、こうした樹種の特性を生かしたものである。岡山大学構内の津島地区と鹿田地区では、二葉松類が平安時代以降、杭として多用されていたことが明らかになっており(能城, 1993)、今回の結果は近世でも同様の傾向であったことを示している。

文 献

平井信二, 1996. 「木の大自然」, 朝倉書店.

能城修一, 1993. 岡山大学鹿田地区から出土した木製品の樹種. 「鹿田遺跡3」, 119-146. 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター.

表1 津島岡大遺跡第26次調査で出土した近世の杭の樹種

樹 種 名	水門1	水門2	水門3	水門4	他*	計
アカマツ	5	5	5	3	2	20
マツ属複雑管束亜属		3		1		4
ヒノキ				1		1
クリ		1				1
コナラ属アカガシ亜属					1	1
ムクノキ		1				1
総 計	5	10	5	5	3	28

*水門3-4間

表2 各標本の樹種同定結果

標本	No	樹種名	製品名	遺構	時代
OKUF-	905	アカマツ	杭	SD11 水門1	近世
OKUF-	906	アカマツ	杭	SD11 水門1	近世
OKUF-	907	アカマツ	杭	SD11 水門1	近世
OKUF-	908	アカマツ	杭	SD11 水門1	近世
OKUF-	909	アカマツ	杭	SD11 水門1	近世
OKUF-	910	クリ	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	911	アカマツ	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	912	アカマツ	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	913	アカマツ	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	914	アカマツ	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	915	マツ属複雑管束亜属	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	916	ムクノキ	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	917	マツ属複雑管束亜属	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	918	マツ属複雑管束亜属	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	919	アカマツ	杭	SD11 水門2	近世
OKUF-	920	アカマツ	杭	SD11 水門3	近世
OKUF-	921	アカマツ	杭	SD11 水門3	近世
OKUF-	922	アカマツ	杭	SD11 水門3	近世
OKUF-	923	アカマツ	杭	SD11 水門3	近世
OKUF-	924	アカマツ	杭	SD11 水門3	近世
OKUF-	925	アカマツ	杭	SD11 水門4	近世
OKUF-	926	ヒノキ	杭	SD11 水門4	近世
OKUF-	927	アカマツ	杭	SD11 水門4	近世
OKUF-	928	アカマツ	杭	SD11 水門4	近世
OKUF-	929	マツ属複雑管束亜属	杭	SD11 水門4	近世
OKUF-	930	アカマツ	杭	SD11 水門3-4間	近世
OKUF-	931	コナラ属アカガシ亜属	杭	SD11 水門3-4間	近世
OKUF-	932	アカマツ	杭	SD11 水門3-4間	近世

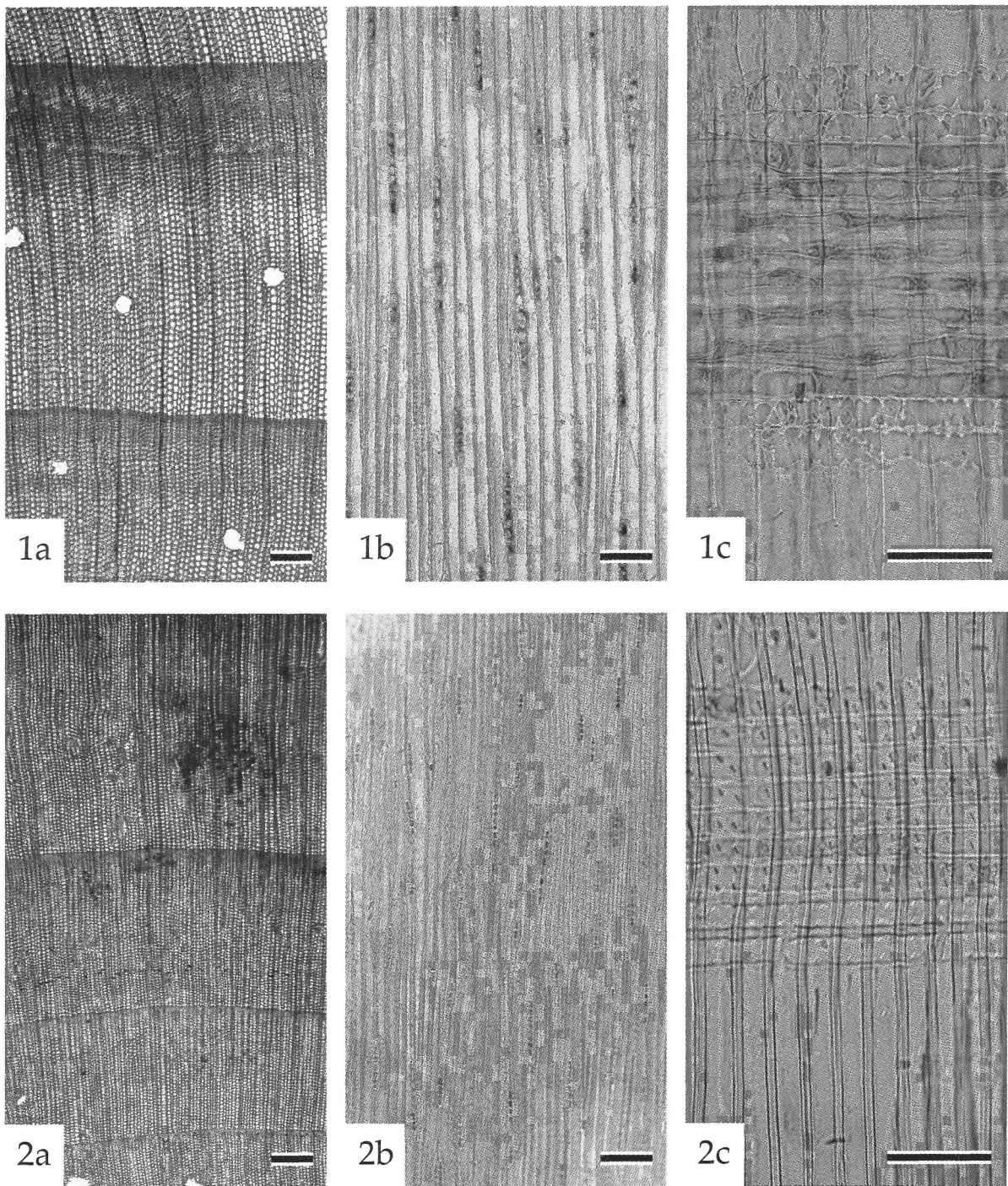


図1. 津島岡大遺跡第26次調査出土木材の顕微鏡写真(1)

1 a-1 c: アカマツ (OKUF-920), 2 a-2 c: ヒノキ (OKUF-926). a: 横断面 (スケール=200 μm), b: 接線断面 (スケール=100 μm), c: 放射断面 (スケール=50 μm).

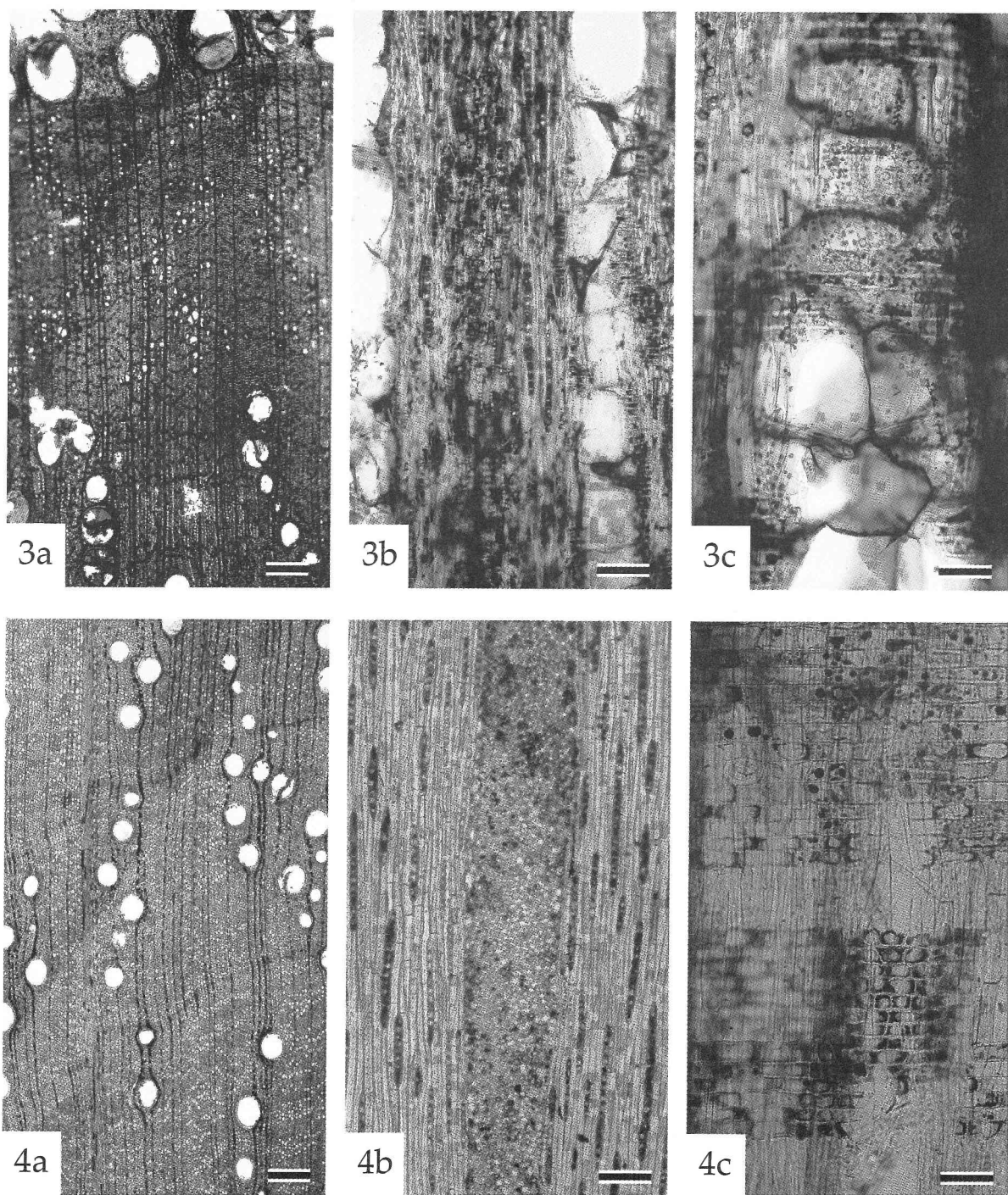


図2. 津島岡大遺跡第26次調査出土木材の顕微鏡写真(2)

3 a - 3 c : クリ (OKUF-910), 4 a - 4 c : コナラ属アカガシ亜属 (OKUF-931). a : 横断面 (スケール=200µm), b : 接線断面 (スケール=100µm), c : 放射断面 (スケール=50µm).

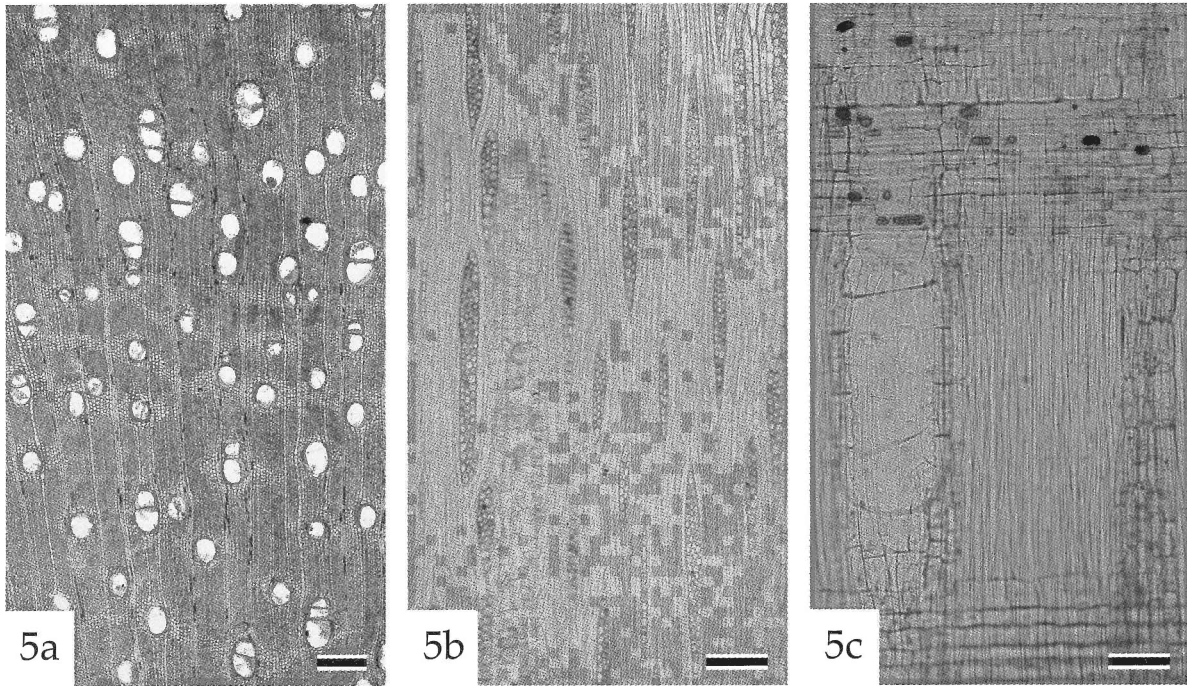


図3. 津島岡大遺跡第26次調査出土木材の顕微鏡写真(3)

5 a - 5 c : ムクノキ (OKUF-916). a : 横断面 (スケール=200 μ m), b : 接線断面 (スケール=100 μ m), c : 放射断面 (スケール=50 μ m).

第6章 結 語

津島岡大遺跡第26次調査では、縄文時代中期・後期、弥生時代、古墳時代後期～中世、近世・近代における遺構・遺物の様相が明らかとなった。本調査地点の北に隣接する第27次調査（創立五十周年記念館）の成果とあわせることで、遺跡の動態がより明確となった。以下、時期ごとに成果をまとめたい。

縄文時代 縄文時代中期・後期の遺構については、谷1と2に挟まれた微高地上に分布が集中することが、他の時期と比べて特徴的である。縄文時代中期に関しては、土坑2基と中期中頃の深鉢が発見され、津島岡大遺跡における最初期の資料が加わった。第27次調査とあわせると、当該期の資料は谷2の北岸に分布が偏っており、出土土器の型式からも谷際における一連の活動の所産といえるだろう。ただし、中期段階の生活面の探索については、今後の課題としてのこされている。一方、後期については、この微高地において炉が構築される様相が明らかとなった。今回1基の炉が発見され、第27次調査とあわせると炉の数は4基となった。これらの遺構の同時性については、遺構に伴う出土遺物が少ないため判然としないものの、炉の設置場所については、多くは谷1あるいは谷2に近い、微高地の縁辺部が選択されるという傾向がみられた。

弥生時代 早期・前期・後期の各段階にわたって生活痕跡が認められる。早期の段階には、谷2の底面付近に4基の貯蔵穴が営まれる。これらの分布が谷2南側の微高地寄りに偏ることから、この段階には谷2南側の微高地が新たな活動領域となることが推定される。前期になると南側微高地への進出は明確となり、土坑が微高地上に一定の間隔を保ちながら集中的に作られている。本調査地点は多くの土坑が検出されたものの出土遺物が少なく、集落からやや離れた場所に位置するものと推定される。第27次調査地点では、谷2の北側の微高地と谷2の緩斜面に前期の水田が営まれており、谷2を挟んで北側に水田、南側に土坑群がひろがる景観が復元される。前期の土坑群については、類例が少ないため機能を推定することは難しい。集落からやや離れた位置にあることから考えると、水田とともに何らかの生産にかかわるものと思われるが、今後の調査研究が必要である。後期になると、用水路と考えられる溝が各微高地につくられる。後期に用水路が整備される状況は、津島岡大遺跡における他の調査地点と同様であり、より本格的な水田経営の基盤が形成されたことを示すものといえる。弥生時代の遺物で注目すべきなのは、津島岡大式並行と推定される舟形土器の出土である。これまで津島岡大遺跡で出土していた当該期の東日本系土器は、遺跡の北東部に位置していたが、今回の発見は南西部におけるものである。北東部と南西部は、ともに当該期の突帯文土器が多く出土する地点であり、双方において東日本系譜の稀少品が分布する状況が今回明らかとなったことは、当該期の集団論や領域論を考える上でも重要な成果といえるだろう。

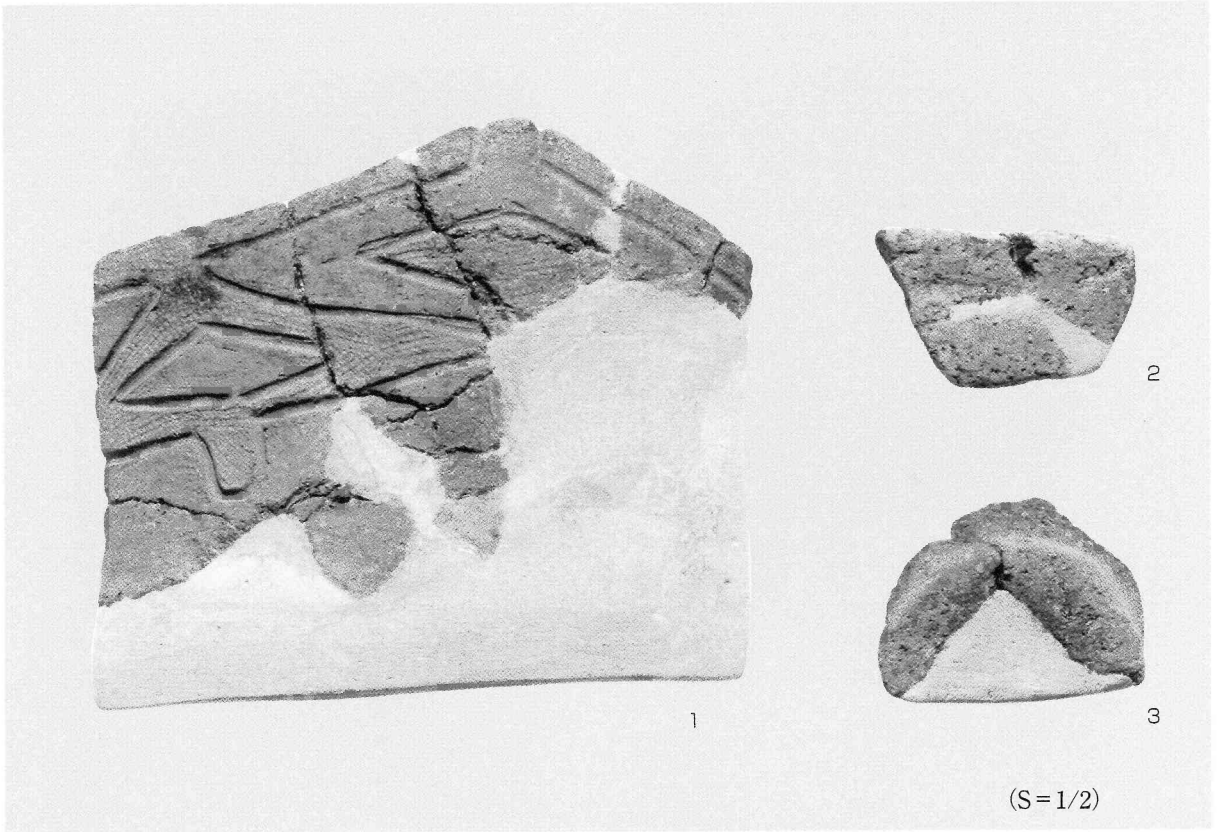
古墳時代後期～中世 考察において述べたが、この時期は道や通路に関する構造物が作られたことが大きな特徴といえる。6世紀末・7世紀初頭を中心とする時期には、柵列と柵列状遺構が築かれた。それらは、列島規模の政治的変革の影響下でなされた集落の再編と集約化の一端を示すものと考えられる。一方、中世になると、溝状遺構と柵列状遺構によって南北の道が整備される。少なくともこの段階には確実に、真北を基準とする土地割りがなされていたことがわかる。この南北ラインは、耕作地用の造成後も、南北方向の大畦畔として踏襲される。**近世・近代** 中世の耕作地の区画を受け継ぎつつ、近世には新たに条里にかかわる大型の東西溝がつくられた。今回初めて近世の木材についての樹種同定を行ったが、東西溝出土の杭の分析によると、古代以来の材木の選択がなされていることが判明した。当該期の木材利用を考える上でも、また他の時代と比較検討する上でも有益な成果が得られた。

以上、各時期を通じて、本調査地点は遺構の内容や遺物量の少なさから集落から離れた縁辺部の状況を呈するものと評価できる。その中で、各時期に特有の行為の結果が遺跡の中で鋭敏に表れていたものといえよう。

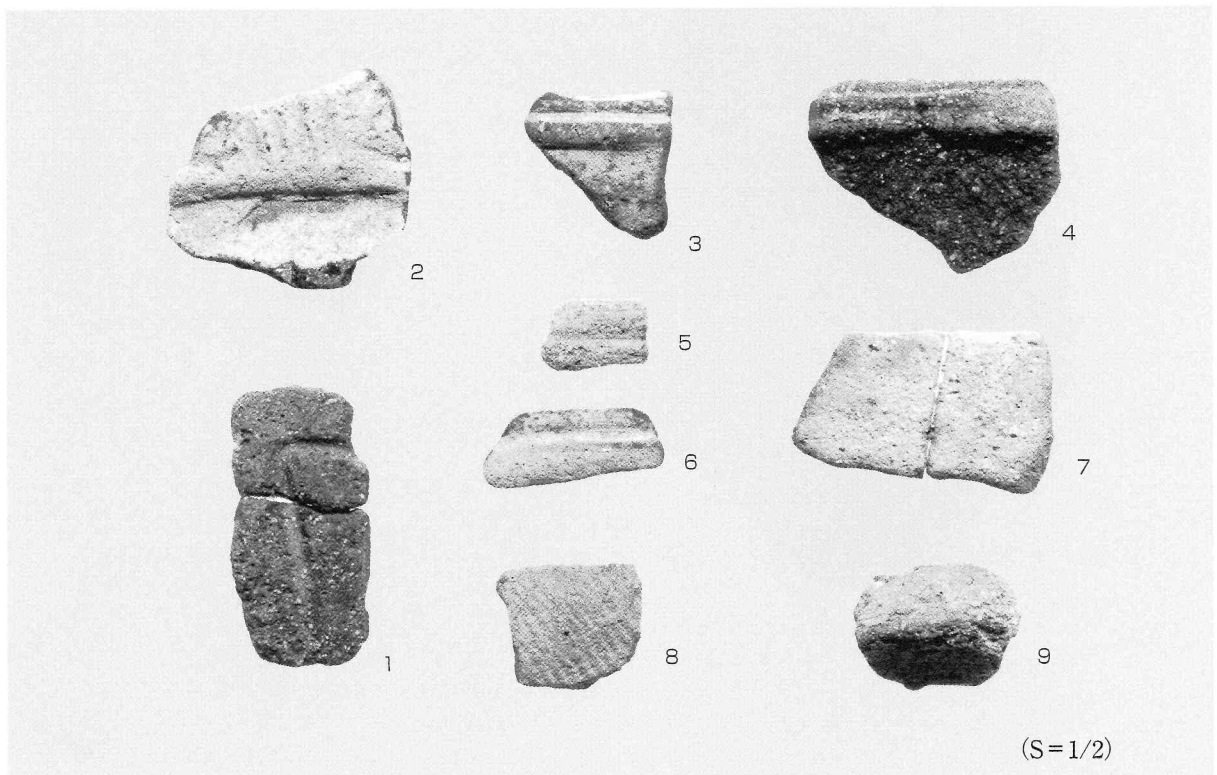


1: 土坑 1・2 (図13)
2・3: 土坑 1 (図13)
(S=1/2)

図版二 縄文時代後期土器



谷 1 出土 (図20)

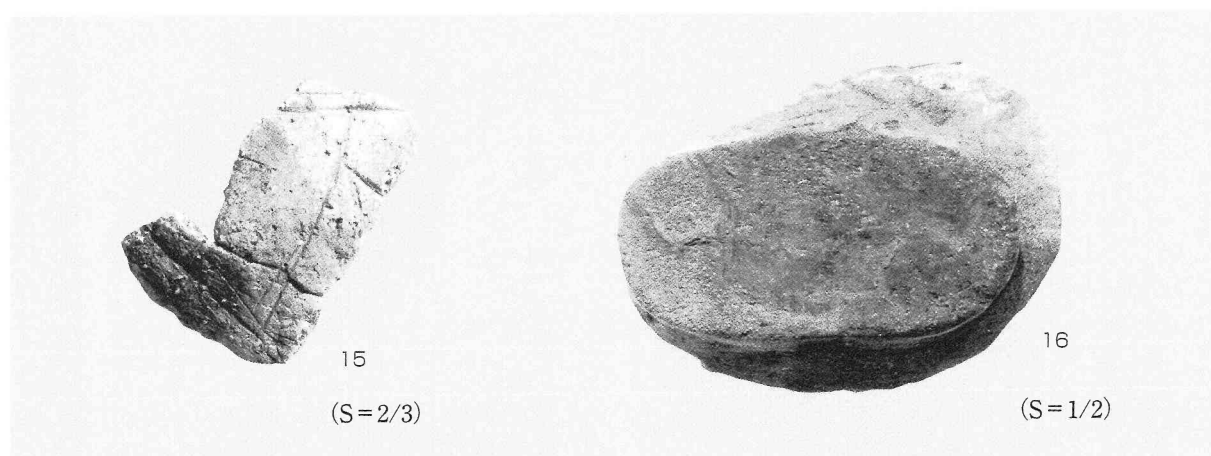


谷 2 出土 (図21)

図版三 弥生時代土器一（貯蔵穴三・舟形土器）

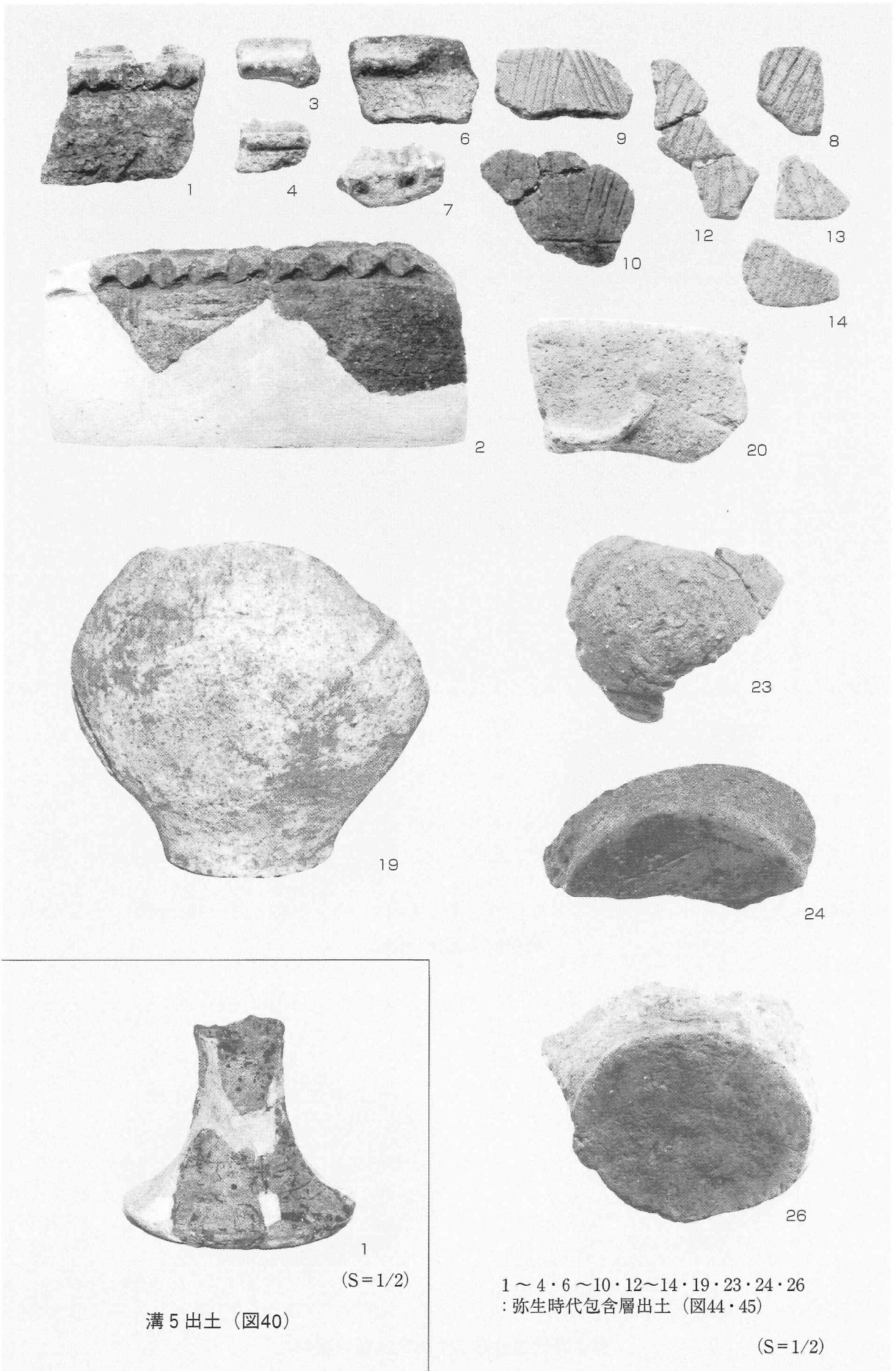


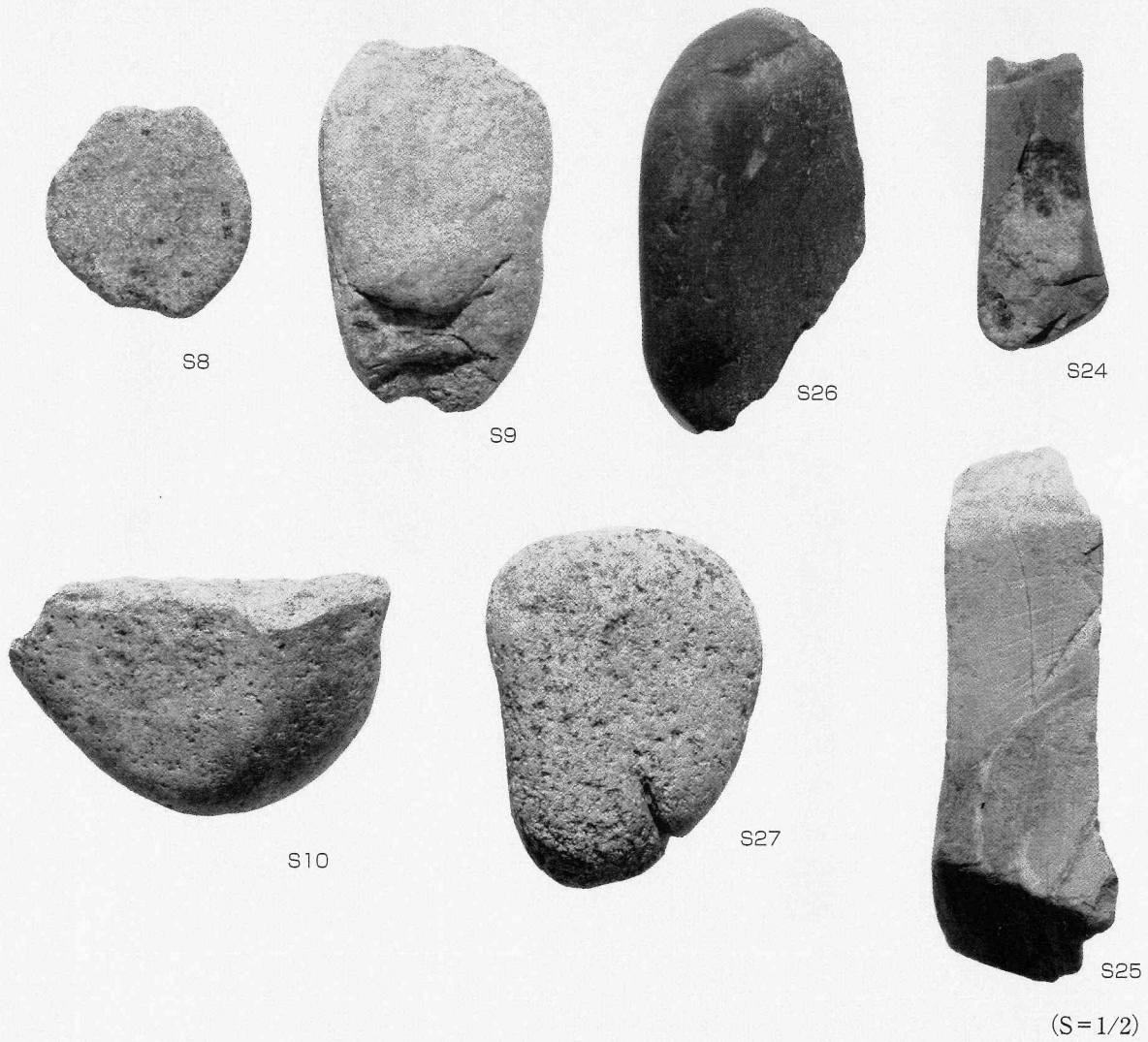
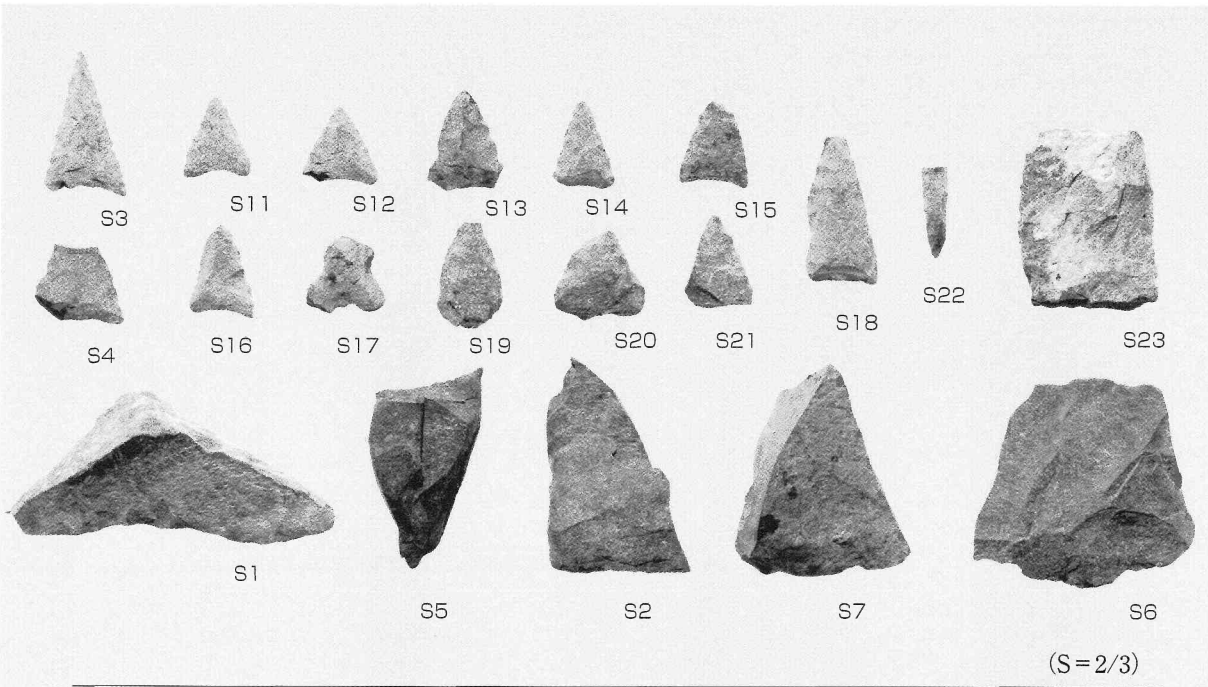
貯蔵穴3出土（図26）



弥生時代包含層出土舟形土器（図44）

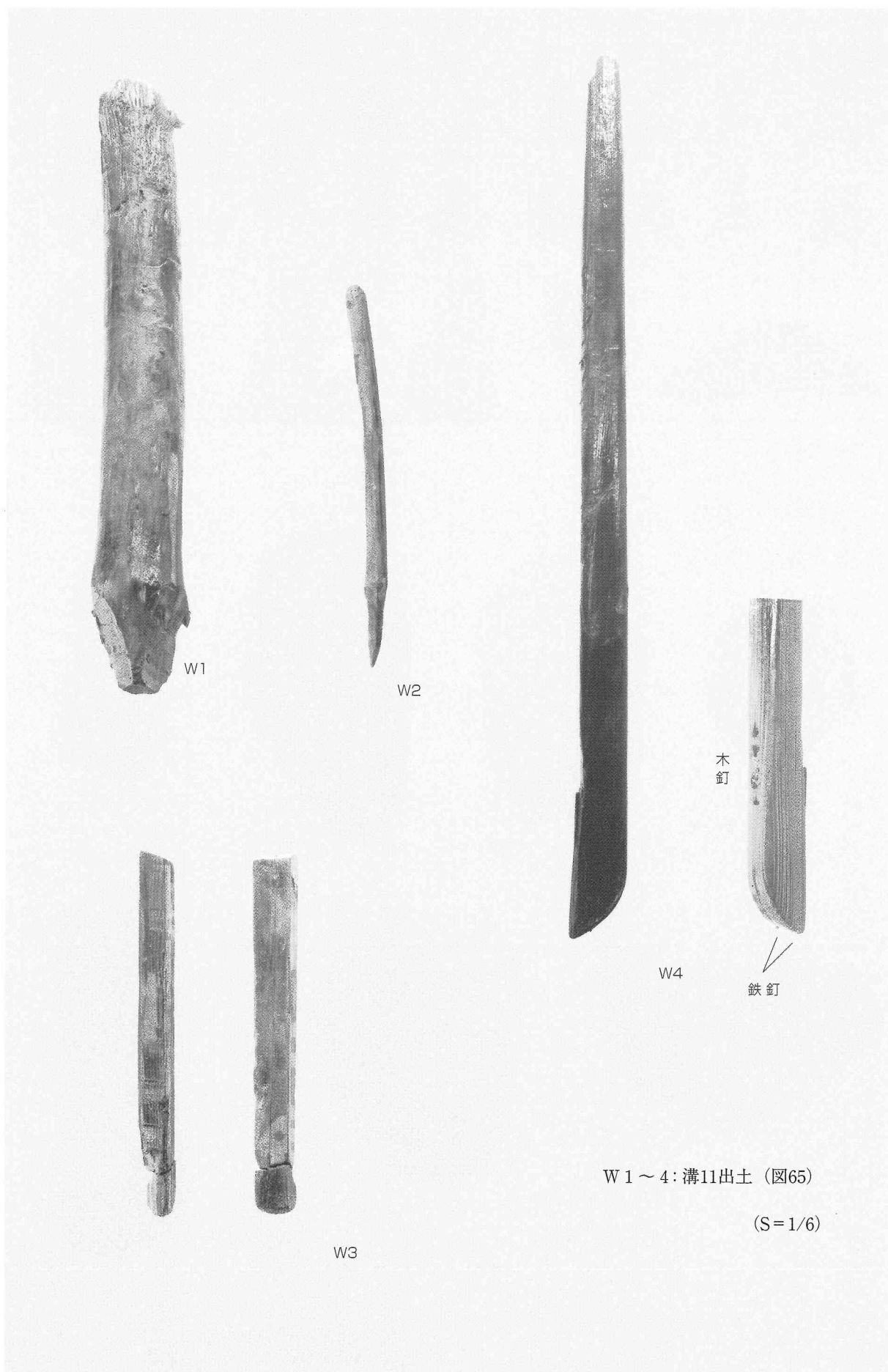
図版四 弥生時代土器二（包含層・溝五）





S1～S10: 弥生時代包含層 (図46)
S11～S27: 遊離した石器他 (図72)

図版六 木器



W 1 ~ 4 : 溝11出土 (図65)

(S = 1/6)

報告書抄録

ふりがな	つしまおかだいいせき							
書名	津島岡大遺跡15—第26次調査—							
副書名	事務局本部棟新営							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第20冊							
編著者名	光本 順・能城修一							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市津島中3丁目1番1号 TEL.086-251-7290							
発行年月日	2005年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
つしまおかだ 津島岡大遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 つしまなか 津島中1丁目 1番1号	33201		34度41分 18秒	133度54分 58秒	20010326 ~ 0718(本体)、 0807 ~ 0928 (共同溝)	1550m ²	岡山大学事 務局本部棟 新営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
津島岡大遺跡 第26次調査地点	その他の生産 遺跡	縄文時代 中期・後期	炉1基・焼土遺構3基・土坑8基・ 溝1条		縄文土器・石器			
	その他の生産 遺跡	弥生時代	土坑11基・溝4条		弥生土器・石器			
	田畑	古墳時代後 期～中世	柵列・柵列状遺構・溝5条・畦畔		須恵器・土器・陶磁器・ 鉄器			
	田畑	近世・近代	土坑31基・溝5条		陶磁器・土器・鉄器			

2005年3月10日印刷
2005年3月15日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第20冊
津島岡大遺跡15

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中3丁目1番1号
(086)251-7290
印刷 西日本法規出版株式会社
岡山市高柳西町1-23
(086)255-2181